ビルマの人権状況と
民主化への道

サフラン革命から半年、2008 年 2 月

タイ・ビルマ国境事実調査報告書

ヒューマンライツ・ナウ

Human Rights Now

はじめに

2007年9月、ビルマにおいて僧侶らを中心とする民主化運動が高揚し、世界で報道されたが、ビルマ軍事政権(SPDC)によって武力弾圧された。

東京に本拠を置く人権団体ヒューマンライツ・ナウ(Human Rights Now)は、2008年2月、この武力弾圧とその後の人権抑圧の状況について調査するため、タイ・ビルマ国境、タイ国タク県メイソットに調査団を派遣した。

調査団は、9月の抗議デモに参加した僧侶、市民計十数名から事情聴取をおこなった。彼らはいずれも昨年9月の民主化デモへの参加を理由に軍事政権の治安当局から逮捕される危険にさらされ、国内からタイに避難せざるをえなかった人々である。証言からは、武力弾圧に際し、著しい人権侵害が発生したことが明らかになった。また、調査団は、調査中の2008年2月に軍事政権が発表した新憲法草案、および総選挙に関する実情についても、民主化勢力との懇談と独自の調査によって状況を把握した。

本調査報告書は、調査団の独自調査に、報道、国連特別報告者の報告書、国際人権団体の報告書等の分析もあわせ、現在のビルマを取り巻く状況、とりわけ現在のビルマの人権と民主化をめぐる状況について、多くの方に知っていただくことを目的として作成・発表するものである。

【調査の概要】

ヒューマンライツ・ナウ調査団は、2008年2 月8日より14日まで、昨年9月に民主化運動が武力弾圧された、ビルマの人権状況を調査するため、タイ・ビルマ国境メイソットに滞在し、調査をおこなった。(調査団は、4名の弁護士、1名のジャーナリストからなり、2/12-14は今野東議員が参加され、複数のメディアが同行取材をした)。

2/8　UNHCR訪問

2/9　Processing Center;　Burma Women's Union[1]訪問

2/10-12 NLDLA(NLD[2]の海外組織) オフィスにて、僧侶、市民からの聞き取り。

2/12　ビルマ入国

ビルマ法律家協会[3]訪問　AAPP(政治囚支援協会)[4] 訪問

NLDLAとの懇談

2/13　メラ難民キャンプ訪問

亡命政府とされるNCGUBなど、民主化団体と懇談

---

[1] ビルマにおける女性の権利実現などを目的とする女性団体http://www.bwunion.org/

[2] National League for democracy　第1において詳述する。

[3] Burma Lawyers Council　民主化を求めるビルマ法律家の協会。バンコク、メイソットにオフィスを有する。

[4] AAPP (政治囚支援協会 Assistance Association for political prisoner。以下「AAPP」という。)
http://www.aappb.org/

2/14　　1990年に選出された国会議員の会議に参加[5]

また、これに先立ち、2007年9月にもヒューマンライツ・ナウの弁護士3名がAAPP、ビルマ法律家協会、女性団体等を訪問した。

メイソットは、川1つ隔ててビルマに接する国境の町であり、ビルマより多数の難民、移民が移り住み、民主化活動家、人権活動家らもオフィスを構えて活発な活動を展開しているため、人権状況に関する第一次情報を得られることから調査を行うこととした。

第1　武力弾圧までの経緯(概観)

1　ビルマにおける民族と宗教

ビルマは多民族国家であり、人口の約70%を占めるビルマ人と、人口の30%を占めるシャン、カレン、アラカン、モン、カチン、カヤー等の少数民族から構成される国である（ビルマ政府は135の少数民族を承認している。）

ビルマ人の人口の約90%は仏教徒であり、キリスト教徒は約4%、イスラム教徒は約4%となっている。

2　歴史的経緯

1942年7月、ビルマ独立義勇軍が、イギリス軍を駆逐することに成功し、日本軍の支援を受けてビルマ国は独立を宣言したが、独立後日本軍がビルマ義勇軍の解体を図りビルマを事実上日本の支配下に置いた。その後各地で日本軍に対する抵抗が始まり、ビルマ国軍、共産党、人民革命党などを中心に、ファシスト打倒連盟が結成され、アウン・サン将軍が指導した。日本の敗戦とともにビルマは再びイギリスの支配下に置かれるようになったが、1948年1月ビルマはイギリスから独立した。

初代首相にはウーヌが就任したが、カレン民族の独立闘争、共産主義グループ、イスラム教徒、モン族の反乱等ビルマの政情は不安定であった。

1962年、ネ・ウィン将軍が、軍事クーデターを起こし全権を掌握し、国軍の指導のもと「ビルマ社会主義計画党」による一党支配を行った。経済面では、企業の国有化、鎖国政策が採用されたが、その結果、ビルマは経済不振に陥り、1987年12月には、国連から後発展途上国の指定を受けるに至った。

3　1988年の民主化運動

1988年3月、ヤンゴン工科大学の一部の学生が、政権に対する抵抗を始め、それが全国に広がり、同年8月後半から9月前半にかけての民主化運動へと発展していった。国民は、「複数政党制の実現」「人権の確立」「経済の自由化」を政府に対して要求し、首都ヤンゴンでは連日のようにデモが行われた。

1988年3月、母親の病気見舞いのために帰国していたアウンサンスーチー氏は、同年8月学生からの支持を受け政治の表舞台に登場することとなった。

[5]National Coalition Government of the Union of Burma　http://www.ncgub.net/

しかしながら、1988年9月18日、国軍の幹部20名から構成される STATE LAW AND ORDER RESTORATION COUNCIL（以下「SLORC」という）[6]により、軍事政権の樹立が宣言され、ビルマ国軍が政治権力を全面的に行使することとなった。

SLORCは、デモ隊を武力により弾圧したが、民主化勢力が求める複数政党の導入と総選挙の実施を公約した。

1988年9月27日、National League for Democracy（以下「NLD」という）[7]が結成され、アウンサンスーチー氏がNLD書記長に就任した。NLDは複数政党の実現、人権の尊重、経済の自由化を求めて活動をした。

1989年5月27日、軍政は国名を「ビルマ連邦」から一方的に「ミャンマー連邦」へと変更し、首都ラングーンの名前をヤンゴンへと変更した。1989年7月20日、軍政はアウンサンスーチー氏とNLDのティンウー議長を自宅軟禁状態においた。

4　1990年5月の総選挙

1990年5月27日、ビルマで30年ぶりとなる複数政党制に基づく総選挙が実施され、NLDが485席中392議席を獲得した。軍事政権が支持した民族統一党（NUP）はわずか10議席を獲得するに止まった。

SLORCは選挙結果を認めず、政権移譲の無期限延期を表明し、「早期に政権委譲するよりも安定した憲法をまず作る」として、民主化のためのロードマップを提唱した。SLORCの提唱した民主化のためのロードマップは以下の内容であった。

①選挙で当選した議員は、憲法制定のための議会（制憲議会）の議員にすぎない

②その制憲議会については、当分の間、開催しない

③軍政が独自に選んだメンバーによって構成される制憲国民会議という別個の場を設置し、そこで新憲法の草案をつくる（その草案の原案は軍政が提示する）

④憲法草案が国民会議でまとまったら、その段階で当選議員から成る制憲議会を招集し、同草案を諮る

⑤制憲議会で審議・承認された案を軍政が最終的にチェックし、正式な新憲法案とする

⑥新憲法草案を国民投票にかけて、国民の承認を求める

5　憲法制定国民会議(制憲国民会議)及び2007年8月までの状況

1993年1月、軍政は、701名の代議員を選んで制憲国民会議を発足させたが、軍政が指名した代議員の中で1990年5月の総選挙で当選した議員は99名しかいなかった。

1995年11月、制憲国民会議のNLD所属の代議員86名が、制憲国民会議の議論の進め方が非民主的であることに抗議して、制憲国民会議をボイコットした。軍事政権は議会をボイコットした代議員全員を除名した。

[6]日本語訳「国家法秩序回復委員会」

[7]日本語訳「国民民主化連盟」

1996年末、ヤンゴン、マンダレー等において、学生デモが行われたが、軍事政権は、武力を用いて鎮圧した。

1996年末から1997年中には多数のNLD党員やその支持者達が、軍政から弾圧を受け、逮捕されたりした。

1997年11月15日、SLORCは名称をSTATE PEACE AND DEVELOPMENT COUNCIL（以下「SPDC」という）に変更した。[8]

1998年9月、軍政が国会開催に応じないことから、NLDは1990年の総選挙で選ばれた議員から構成される国会代表者委員会を発足させた。

2003年5月30日、地方遊説のためビルマ北部ザカイン管区を訪問していたNLD書記長アウンサンスーチー氏とティンウー副議長らが警察によって拘束され、その際、アウンサンスーチー氏らの遊説を妨害しようとしたUSDA(Union Solidarity Development Association)のメンバーとNLD党員やその支持者らとの間で衝突が起こり、死者4人と負傷者50人以上が発生した。なお、USDAは、1993年にSPDCによって設立され、2006年には、次期選挙のために政党となることがアナウンスされた、体制翼賛組織である。

その後アウンサンスーチー氏はInsein刑務所に収容され、NLD幹部のアウン・シュエ議長ら7人が自宅軟禁にされ、NLD本部とヤンゴン市内にある複数のNLD支部が治安当局によって封鎖された[9]。アウンサンスーチー氏はその後自宅へ戻されたが、以後現在に至るまで自宅軟禁状態に置かれている。

2004年5月、軍政は、制憲国民会議を再び召集し、同会議は同年7月まで続いたが、NLDのメンバーはこの会議に参加しなかった。同年10月、キンニュン第一書記(当時)が政権から追放された。

2005年2月及び12月、制憲国民会議が召集されたが、NLDのメンバーは参加しなかった。

2006年1月、制憲国民会議は終了し、同年10月に再開されたが、依然としてこの会議にはNLDのメンバーは参加していない。また、憲法に反対する言動を有罪とする法律の規定が残され、国民会議の出席者は公開の議論を禁止された。

６　軍事政権による人権侵害[10]

国連人権委員会(後に理事会)は、ビルマの人権状況が深刻であることから、国別の特別手続に付し、近年はセルジオ・ピニェイロ氏が特別報告者の任にあたってきた。

国連特別報告者ピニェイロ氏の報告、米国国務省報告、アムネスティ・インターナショナルその他人権団体報告によれば、ビルマにおいては以下のとおり、軍事政権による恒常的な人権侵害が存在する。

---

[8]日本語訳「国家平和開発評議会」

[9] 2003年6月1日付朝日新聞、同日付読売新聞、同年同月2日付読売新聞、同年同月20日毎日新聞

[10]米国国務省1997年ビルマ人権侵害に関する報告、国連人権特別報告者ピニェイロ氏の報告 E/CN.4/2005/36　E/CN.4/2006/34

（１）民主化運動、集会、結社、表現の自由に対する弾圧

ビルマでは、国家の治安維持活動に従事している軍・治安警察の活動に対する妨害行為およびその計画は死刑または終身刑とされ、「国の安全もしくは治安回復に対して危害を与えることを意図した方法で多数国民や一部国民の倫理道徳、活動を犯す行動をした場合」は懲役７年の刑に処せられる(緊急事態法)。

また、威力をもって国家組織を攻撃し、それに対する援助、謀議、計画、賛同、支援、好意を示すこと、秘匿等はすべて、国家反逆罪として死刑または終身刑となり、国家組織に尊敬の念を失わせるようなすべての行為、扇動は無期または有期遠島刑、国家組織に対する反乱の示唆、扇動を含む文書を配布した者は３年以上10年以下の禁固刑とされている(刑法121-124条)。また、国家安定の破壊を目的とする扇動、演説、示威あるいは書面配布などの行為をした個人は５年ないし20年の禁固刑に処せられ、これに違反した団体は廃止、活動停止などの処分を受け、金銭・資産を国家に押収される(国家責務の平和的移譲及び国民議会の成功を妨害から守る法令)。

こうした弾圧立法は軍事政権によって広く恣意的に活用され、軍政に批判的な活動は厳しい刑罰の対象となり、集会、結社、表現の自由、民主化活動は弾圧されている。

（２）強制失踪、恣意的拘禁および拷問

ビルマでは、一般国民及び政治活動家が数時間から数週間に渡って行方不明になるといった事態が引き続き発生している。国防情報管理局理事会（DSSI）の職員は通常、個人の家族に連絡すること無しに尋問のために逮捕を行っている。多くの場合－全てではないにしても－は、逮捕された個人は程なくして釈放される。逮捕等の行為は、自由な政治思想の表明を妨害すること或いは集会を妨害することを目的としている。

民主化活動に参加したことを理由に恣意的に拘禁をされ続けている政治犯は、2007年９月の弾圧前で1100人以上に及び、獄死した者も少なくない。

当局は政治犯に対し、日常的に、脅迫及び分別を喪失させることを目的とした尋問テクニックを用い、拘留者に対する拷問及び非人道的な取り扱いをしている。最も一般的に行われる非人道的な扱いは睡眠及び食事の禁止、さらに、24時間無休の尋問、殴る蹴るの暴行、拘禁者同士が相対して殴打を強制される、頭上から一晩中水滴を垂らされる(著しい苦痛を伴う)などである。

刑務所の状況は劣悪である。最も過酷な政治犯収容所として知られる、ヤンゴン近郊のInsein刑務所の管理体制は、運動、蚊帳の不足、また、栄養面に関する配慮の欠如、不適当な医療ケア、独房監禁、及び「犬独房」(”Military Dog Cells”と言われる犬小屋ほどの小さな囲い)を含め、非常に劣悪である。懲罰として、足かせを装着されたまま数年間に渡り窓のない暗い独居房に閉じ込めるやり方や、死刑囚の監房に留置さ

れるなどのやり方がある。[11]政治犯の状況については第３においても詳述する。

（３）公正な公開裁判の拒否

司法機関は行政機関から独立しておらず、軍政が最高裁判所の判事を指名し、また、最高裁判所は、軍政の承認を得た下級裁判所裁判官を任命する。

政治的な裁判を行う場合、審理は非公開であって、弁護士による十分な法律的援助を受けることができない。

（４）プライバシー、家族、住居或いは通信への恣意的干渉

軍政は一般国民の生活に干渉し、広範囲に及ぶ情報網及び行政手続きを通し、多くの国民の－とりわけ政治的に活動的な人物の－移動及び活動を綿密に監視している。軍政は、個人的な移動監視の一貫として、住人の登録書類を確認するために、夜間国民の自宅を訪れる。治安部隊関係者は、私的な通信及び手紙を遮り、令状無しで私有地及びその他財産の捜索を行う。2007年９月末当局によって外国との通信が遮られたように、軍政は外国のラジオ放送の電波妨害を行っている。また、国民は一般的に外国の出版物を直接購読することが出来ず、公務員が外国人と面会する際には、事前に許可申請することが義務付けられている。

（５）強制労働・恣意的な財産の没収

ビルマ全土で民間人、とりわけ少数民族には、軍のキャンプのポーター、建設、維持、点検、軍を支援するための他の仕事、産業計画に関する仕事、道路、鉄道、橋の建設や維持、他のインフラ関連の仕事、様々な種類の他の仕事のための強制労働が課せられている。

強制労働には定期的に各戸に割り当てられるもの、軍が駐留した際に不定期に課せられるものがある。ILOの2003年の報告書においても、「当機関（ILO）は、ビルマ中央部では強制労働の使用がおそらく減少しているという印象を持つ一方で、ゲリラ活動が続き、多くの軍隊が展開するタイ国境周辺や、北アラカン州（当地では大規模な治安部隊が駐留している）の状況はとりわけ深刻で、ほとんど変化がみられないと思われる」とされている[12]。

軍事政権が行う開発事業や、多国籍企業等とのジョイント・ベンチャーでのパイプライン、ダムの建設においては、プロジェクト予定地に居住する住民が強制的に退去を求められ、恣意的に財産を没収されたうえ、男女ともに軍のために、インフラ整備等の強制労働にかり出され、これに抵抗した者は殺害されたり、レイプされる等の事態が起こる。強制労

[11] Association of Assistance for Political Prisoners(AAPP) からの情報。ヒューマンライツ・ナウは、2007年９月および2008年２月に二度にわたり、同団体を訪問、元政治犯より事情を聴取した。

[12]GB. 286／6、2003年３月

働にかり出された女性は、昼はポーターをさせられ、夜はレイプをされるという奴隷状態に置かれることがしばしば報告されている[13]。

（６）女性に対する暴力

全土に展開する軍によって、女性に対するレイプなどの暴力が後を絶たないが、告発を恐れてレイプを告発することができない状況にあり、女性に対する軍の不処罰が横行している[14]。

第２　デモの発生・弾圧とその後の進展

Ⅰ　弾圧に至る経緯、弾圧の経過及びその後の進展の時間的経過[15]

日付	内容	情報源
8／7	State Peace and Development Council(“SPDC”)(国家開発和平協議会)が石油燃料と天然ガスに対する補助金を撤廃し、一部商品の価格が急激に高騰した。	“Crackdown: Repression on the 2007 Popular Protests in Burma” by Human Rights Watch on December, 2007 [16](以下、“HRW 報告書”という)
8/15	ビルマ政府が天然ガスと石油の公定価格を500%以上値上げした。[17]	Report of Special Rapportuer to

[13] 米国第９巡回控訴裁判所は、ビルマ軍事政権とジョイント・ベンチャーで天然ガスパイプライン建設事業を行った米国資本ユノカル社に対しビルマ人が提訴した訴訟で、同プロジェクトにおける強制労働、拷問、レイプの実態につき、国際法のユス・コーゲンスに違反する重大な人権侵害であると認定した(Doe v. Unocal Corp, 2002 U.S. App .Lexis 19263, 9th Cir, Sept 18,2002).

[14] Shan Women’s Action Network (SWAN) “License to Rape” http://www.burmainfo.org/swan/LTRsummary_jp.html を参照。

[15]Human Rights Watch Report、 国連特別報告者報告書のほか、外務省ホームページ「ビルマにおけるデモを巡る情勢（日本政府の対応等）」(http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/myanmar/josei.html)（以下「外務省ホームページ」という。）Wikipedia “2007 Burmese anti-government protests” (http://en.wikipedia.org/wiki/2007_Burmese_anti-government_protests)（以下「Wikipedia 英語版」という。）などを参照した。

[16] Human Rights Watch, “Crackdown, - Repression of the 2007 Popular Protests in Burma“ Volume 19, No. 18(c) December, 2007 （以下「HRW 報告書」という。）

[17] 2007 年８月 15 日、ビルマ軍政は、天然ガスと石油の公定価格を大幅に引き上げた。値上がり幅は以下のとおり。

・ガソリン……１ガロン（4.5 リットル）：1500 チャット（140 円）→2500 チャット（230 円）

・ディーゼル油…１ガロン（4.5 リットル）：1500 チャット（140 円）

日付	内容	情報源
		Human Rights Council on Dec. 4, 2007（“UN 報告書”という）[18]
8/19	民衆による抗議運動。88 世代学生グループ指導者等数十名がヤンゴン市内を平和的に行進した。プラカードやスローガンはなく、ただ歩くというスタイルで行われた。	HRW 報告書。UN 報告書
8/21	88 世代学生グループ等複数が逮捕される。25 日までに 1000 人以上の活動家が逮捕された。	HRW 報告書
9/5	パコックで、物価上昇に対する僧侶の抗議デモがあった。国軍が威嚇射撃をし、一人の僧侶が死亡。また、街頭の柱に縛りあげられ、人々の目の前で暴行された僧侶がいた。	HRW 報告書。UN 報告書
9/6	パコックの地元当局と宗教省の役人がデモに中心的な役割を果たした僧院を訪れた際、住民側がこれを包囲し、一行が乗っていた車に火をつけた。	HRW 報告書
9/9	All Burma Monks Alliance（“ABMA”）(全ビルマ僧侶連盟)は軍政に対し、パコックでの弾圧に対する即時謝罪を求めるとともに、物価の値下げ、反体制運動指導者の解放、対話の要求をした（9 月 17 日を期限とした）。	HRW 報告書。UN 報告書
9/17	連日デモ	HRW 報告書
9/18	300 人ほどの僧侶がヤンゴンのシュエダゴン・パゴダあたりに集まったが、民服をきた者たちによって中に入るのを阻まれ、宗教的儀式を執り行うことができなかった。	HRW 報告書（目撃者）。UN 報告書

→3000 チャット（280 円）

・圧縮天然ガス…1 タンク：2800 チャット→15000 チャット

この値上がりにより、タクシーやバスの運賃が大幅に値上がりし、食料品などの物価水準に大きな影響が出た。

[18] Human Rights Council, Sixth session Agenda Item 4, “Human Rights Situations That Require the Council’s Attention, Report of the Special Rapporteur on the Situation of Human Rights in Myanmar, Paulo Sergio Pinheiro, mandated by resolution S-5/1 adopted by the Human Rights Council at its 5th Special Session” December 7, 2007 （以下「UN 報告書」という。）

日付	内容	情報源
	シットウェ(Sittwe)においても、400人ほどの僧侶による商品の価格を下げるようせまる抗議デモがあり、夜には千人ほどの人々が抗議のために集まった。警察は催涙ガスを発砲した。 この衝突により、政府側と民間人の何人かが怪我をし、入院する者もでた。何人かの僧侶が拘留された。	Democratic Voice of Burma, September 22, 2007.[19]
9/19	150人ほどの僧侶がシュエダゴン・パゴダに集まったが、またパゴダに入ることを拒否され、スーレー・パゴダまで歩き、祈りをささげた。	HRW報告書
9/20、21	僧侶、市民は集まり、抗議の行進をしたが、軍による介入はなかった。	HRW報告書
9/22	僧侶約500人がアウンサンスーチー氏自宅前に設計されたバリケードを通過し、同氏に対する短時間の読経が許可された。	HRW報告書
9/23	推計約2万人（うち僧侶約3000人）のデモ隊がヤンゴン市内でデモをし、軍政に対し、アウンサンスーチー氏の解放と権力の委譲を求めた。拳銃を持った治安部隊が出動した。	HRW報告書
9/24	デモ参加者が推計15万人（うち僧侶が3万から5万人）。	HRW報告書
	宗教大臣が国営テレビ（MRTV)に出演し、今回の抗議運動を批判した。また、「法に基づき」措置はとられると述べた。	HRW報告書。UN報告書
	25日付けNew Light of Myanmar紙は、24日に命令93号が出され、僧侶が世俗的行為を行うことが禁止されたと報道した。	UN報告書
9/25	朝から軍関係者が市内を巡回し、デモに参加しないように警告した。 ABMAと88年世代が市民に対し、経済の見直しや政治犯の解放等のために団結を呼びかける共同声明を出した。	HRW報告書
	夜間外出禁止令発布。軍政は、ザーガナ氏（Zargana）やU Win Naing氏など、デモ参加者を支援した著名人の逮捕に踏み切った。 大量の国軍部隊がヤンゴンに投入された。	HRW報告書

[19] HRW quoted “Monks Bashed During September 18 Sittwe Protest”.

日付	内容	情報源
9/26	暴動鎮圧部隊と国軍部隊がシュエダゴン・パゴダに集まった僧侶を包囲して、パゴダに入るのを阻み、また暴行を加え、多くの僧侶が重傷を負った。 また、目撃者によると、部隊は催涙ガスをながし、拳銃を何発も撃った。約500名の僧侶及び市民がパゴダに進入。	HRW報告書（目撃者（U Maung Naing, Wei Wei Mar)）。Wikipedia英語版（BBC、ローター）
	僧侶一人が死亡。	HRW報告書
	デモ隊はシュエダゴン・パゴダから3km離れたスーレー・パゴダに移動したが、そこでも機動隊とSwan Arr Shin（暴力的な民兵部隊）のメンバーから暴行を受け、強制解散させられた。多くの市民が暴行を受けた。	HRW報告書
	市西部のThakin Mya Park(タキン・ミャ公園)付近でも、デモ隊が、国軍部隊とSwan Arr Shin（暴力的な民兵部隊）に足止めされた。兵士がデモ隊に実弾を水平発射し、少なくとも4人が銃撃された。	HRW報告書
	軍政は、ヤンゴンとマンダレーにおいて、日没から日の出までの外出禁止令を発令。ヤンゴン地区コミッショナー自身が外出禁止令第114号を刑事訴訟法に基づき発令し、また、命令第1号は、同日発令され、その後命令第2号は、10月2日、命令第3号は10月12日、命令第4号は10月13日に発令された。外出禁止令は2ヶ月間適用される予定であったが、10月20日付の命令第5号により解除された。	UN報告書。Wikipedia英語版(BBC, Mizzima; www.mizzima.com, Swedish National Radio)
26、27	治安部隊がヤンゴン市内各所の僧院を襲撃した。Ngwe Kyar Yan(ングウェチャーヤー）僧院への襲撃で、治安部隊が僧侶と激しく衝突し、100人あまりの僧侶を逮捕した。	HRW報告書（僧侶であり、襲撃を受けたU Khan Diの証言）
27	国軍部隊は再びNgwe Kyar Yan 僧院にきて僧侶を逮捕しようとし、市民側と衝突した。高校教師を含む7人が治安部隊の暴行又は銃撃により殺された。	HRW報告書
	昼頃、スーレー・パゴダ付近でも武力弾圧が発生。治安部隊はパゴダとAnawratha Roadの交差点のあたりに集まり、道路を封鎖し、市民集団に対し解散するように威嚇しながら近づいて	HRW報告書

日付	内容	情報源
	きた。国軍兵士らが大量デモ参加者を強制解散させたが、この際空中射撃をしたあと、デモ隊に向かって発砲し、日本人ジャーナリスト長井健司氏が死亡した。また目撃者によると、そのほかにも男女一人ずつが銃弾を受け、死亡した。	
	また、パンソダン陸橋で88年世代学生グループの旗を掲げた学生が射殺された。	HRW報告書
	タームエ第三高校前に集まったデモ隊約2万人を国軍部隊が包囲したところ、軍用トラック1台が突入してきて人々をはね、3人が殺害された。トラックの荷台から降りた兵士は逃げるデモ隊に対し発砲し、複数の死者がでた模様。HRWはこのときの衝突で少なくとも民間に8名の死者がでたことを確認している。	HRW報告書
	軍政がビルマ全土で僧院を襲撃し、ヤンゴンで少なくとも200名、北東部で約500名の僧侶を逮捕した。	Wikipedia英語版
28、29	軍政は、兵士や暴動鎮圧部隊、民兵組織の数千人をヤンゴン中に配備し、街頭の支配権を取り戻すことに成功した。彼らは、市民が街頭に集まろうとする気配を見せると、手当たりしだいに暴行をし、実弾やゴム弾の発砲を行った。	HRW報告書
	治安部隊は、デモにかかわった僧院を襲撃し、僧侶の逮捕を続行した。数千人の僧侶を拘束し、僧院も占拠された。	HRW報告書

Ⅱ　弾圧に関与した団体[20]

弾圧に関与した団体は、ビルマ軍、the Office of Military Security Affairs (MSA)、 機動隊、地方警察、the Special Branch Police のほか、民兵として、Union Solidarity and Development association(連邦連帯開発協会、USDA)、およびSwan Arr Shin がある。

抗議行動に対する弾圧の際には、軍、機動隊および民兵が協力しあっていることが確認されている。街頭では、盾と警棒を持った機動隊の後ろに、ビルマ軍が控えており、実弾を撃ったのは、主にビルマ軍であった。

[20] HRW報告書98頁

MSAは、弾圧後の逮捕を行うための情報収集活動を行い、また、Insein刑務所での尋問にも関与した。

警察及び機動隊は、デモの鎮圧、抗議活動を行う者の逮捕及び被拘束者の尋問に関与した。

The Special Branch Police は、収容所での尋問に関与した。

現政権SPDCは、USDAやSwan Arr Shin（Swan Arr Shin）といった市民の組織をコントロールしており、かかるコントロールが、弾圧の際には、住民のリストを届出させ、宿泊者を登録させる等の活動に寄与している。

USDAは、1993年にSPDCによって設立され、2006年には、次期選挙のために政党となることがアナウンスされた。メンバーが政治的又は刑事的な暴力に関与していることが懸念される[21]。市民の福祉のための組織とされているが、現実には、軍によってコントロールされ、市民を監視するための組織となっている。公務員と教員は加入を強制され、学生も加入を強くすすめられる。政府の資金的援助により、地域の企業にローンをしたり、営業所を貸したりといった活動も行っている。

Swan Arr Shinは、元囚人やならず者を集めて結成された暴力的な民兵である。軍政はSwan Arr Shinの存在を正式には認めていないが、現実には、機動隊によって軍事的な訓練を与えるなど、関与している。

USDAとSwan Arr Shinは、直接的な暴力行為を僧侶・市民に対しておこなったほか、とりわけUSDAは、デモに参加して混乱をつくりだし、情報をさぐるスパイとして、またデモに参加した者をさがしまわる密告者として弾圧に不可欠の役割を果たした。Swan Arr Shinは被拘束者の運搬や、僧侶に対する暴力行為に役割を果たした。

Ⅲ　活動家のデモに対する弾圧

2007年8月19日、燃料費の値上げに抗議し、1988年の民主化運動の際の学生リーダーだった活動家(以下、「88世代学生グループ」という)の指導者等数十名がヤンゴン市内を平和的に行進し抗議活動を開始した。

これに対し軍政は、21日夜、88世代学生グループの主要メンバーのミーコーナイン、コーコージー、ミンゼーヤらを含む数十名を逮捕、その後も88世代学生グループの幹部などの捜索が続いた。軍政は警察署やホテル、旅館などに、強制労働問題などで活躍する女性活動家スースーヌイ氏、テイチュエ氏らの写真を配り、居場所についての情報を提供するように指示した[22]。

8月25日までに、1000人以上の活動家が逮捕された[23]。その後のデモに対する弾圧のうち報道されているものには以下のような事件があった。

2007年8月28日

[21] UN報告書12頁

[22] http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews

[23] HRW報告書

同日午後1時頃、ヤンゴン市内カマユッ区フレーダン市場周辺において、スースーヌイ氏を含む国民民主連盟(NLD)党員ら約10人がデモを行った。
USDAが3台のトラックに分乗して待ちかまえ、参加者に暴力を振るった。スースーヌイ氏は暴行を受けた際に怪我をし、病院へ運ばれた。このデモの参加者と見物人を合わせて、少なくとも10人程度がトラックに引きずり込まれ連行された[24]。

2007年9月2日

ラカイン州北部のブティーダウン郡で午前10時から国民民主連盟(NLD)党員のイェテイン氏が燃料や日用品の値下げを求めるプラカードを掲げて単独でデモを行ったが、同氏は警察に逮捕された[25]。

2007年9月5日

イラワディ管区ボガレー市では、国民民主連盟(NLD)党員のアウンキンボ議長ら党員15人が午前8時半頃から日用品の値下げやアウンサンスーチー氏をはじめとする政治囚の解放などを求めるデモを行った。アウンキンボ氏は逮捕された[26]。

2007年9月10日

ラカイン州タウンゴウッ市では、ソーウィンという男性が、デモを行ったことを理由に、手錠をかけられて連行され、即日裁判で4年の禁固刑判決を受けた[27]。

Ⅳ　僧侶の行動

2007年9月5日

ビルマ中部マグエ管区パコック市で、約500人の僧侶が物価上昇に抗議するデモを行った。これに対し、軍は、僧侶に威嚇発砲したうえ、棒で殴るなどの暴行を加え、僧侶約10人を拘束した。[28]軍の威嚇射撃により、僧侶一人が死亡した。さらに、街頭の柱に縛り上げられ、人々の目の前で暴行を受けた僧侶がいたとされている[29]。

2007年9月6日

同日早朝、地元当局、警察、宗教省の役員らがパコック市内の複数の僧院を訪れたが、デモに中心的な役割を果たした僧院を訪れた際には、パコックの住民約千人が、その僧院を包囲し、一行が乗ってきた車4台に火をつけた[30]。

2007年9月9日

All Burma Monks Alliance（略して「ABMA」、以下「全ビルマ僧侶連盟」という。）は、軍政に対し解答期限を9月17日までとして、パコックでデモに

[24] http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews、ビルマ情報ネットワーク http://www.burmainfo.org/politics/88GSG_200708.
[25] http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews
[26] http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews
[27] http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews
[28] http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews
[29] HRW報告書、UN報告書
[30] HRW報告書

参加した僧侶達に暴力を振るったことに対する即時謝罪、物価の値下げ、アウンサンスーチー氏をはじめとする反体制運動指導者の解放、民主化勢力との政治的対話を要求した。[31]軍政は、同連盟の要求を無視したため、連盟は軍政幹部を仏教徒とは認めないものとし、連盟に加わる僧侶は軍政関係者からの寄進を拒否し始めた。調査団がインタビューした【僧侶1】は以下のとおり証言した。

> 9月5日、パコック市で、僧侶たちが、「市民の生活が楽になるようにきちっとした政策をするように」と軍政に対し要求を行ったが、軍政はこの要求に応じず、逆に僧侶を取り締まり、僧侶を電柱にくくりつけて殴ったり蹴ったりするという暴行を加えるという弾圧を行った。そのため、全国の僧侶が軍政に対し不審感を抱き、僧侶が立ち上がることとなった。全ビルマ僧侶連盟という名前の組織が、外国メディア（VOA、ＢＢＣ、RFA等）を通じ、全国の僧侶たちに「立ち上がれ。」との声明を発表した。
>
> そしてそれ以降、僧侶たちが政府からの寄進喜捨を拒否する、托鉢を俯せにする（ビルマ語では「ダベイン」という）という意思を表示をしたことから、政府の立場も硬化していった。

2007年9月17日

連日デモが行われた（HRW報告書）。軍政は、公務員に対し、9月17､18日の両日を特別厳戒態勢の日として、勤務時間内に外出することを禁止するなど、僧侶グループが呼びかけている9月18日からの一斉デモへの警戒を強めた[32]。

2007年9月18日

同日午前、ヤンゴンで僧侶約400人が列を組んでシュエダゴン・パゴダ(Shwedagon Pagoda)に向けて行進した[33]。シュエダゴン・パゴダ付近に、300人ほどの僧侶が集まったが、民服を着た人たちによって中に入るのを阻まれ、宗教的儀式を執り行うことができなかった。目撃者によれば、その際軍関係者による暴力はなかったが、僧侶の抗議の様子についてはビデオテープに撮っていたとのことである。抗議運動は、平和的に、僧侶の戒律の下に行われ、また、寄進拒否は、この日に正式に合意された[34]。

マグエ管区アウンラン市でも僧侶約90人が、マンダレー管区チャウパダウン市では約100人が行進した。バゴー管区タラワディ市でも、約200人の僧侶が行進した。

同日午後には、マグエ管区パコック市で約1000人の僧侶が行進し、ヤンゴンのバハン区や南オカラパ区でも数百人が行進した。

バゴー管区バゴー市で約2000人、ラカイン州シットエ市でも数百人規模のデモが起きた。シットウェ市のデモでは、当局が催涙弾を打ち入れて威嚇発砲した。

---

[31]HRW報告書、UN報告書、赤津陽治 http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews、2007年9月14日付読売新聞

[32] http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews

[33] http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews

[34] HRW報告書（目撃者）、UN報告書

[35]この衝突により、政府側と民間の何人かが怪我をし、入院する者も出た。何人かの僧侶が拘留された。そのうちの一人であるU Warathami氏は、後にDemocratic Voice of Burmaに対し、抗議の際、軍隊にブーツで蹴られる等の暴行を受け、さらに警察に連行された後も意識を失うまで暴行されたことを報告している[36]。また、報道によると、ヤンゴンの80キロほど北にあるPeguにおいても、1000人ほどの僧侶による抗議デモがあった[37]。

2007年9月19日

ビルマ第2の都市マンダレーで僧侶約1000人がデモ行進を行った[38]。ヤンゴンでも、300人以上の僧侶が街頭を読経しながら行進し、ヤンゴン東部でも僧侶100人ほどの集団が街頭を行進し、これとは別に150人ほどの僧侶の集団が仏塔シュエダゴン・パゴダに向かったが、またパゴダに入ることを拒否され、スーレー・パゴダまで歩き、祈りをささげた[39]。ビルマ軍事政権は、9月19日付国営紙に、18日の僧侶らによるデモ行進に関する記事を掲載した[40]。

2007年9月20日

18日以来最大規模の僧侶のデモ行進が行われ、行進を行った僧侶らを囲むように、大学生などの若者が手と手を繋いで、一緒に歩いた。

2007年9月21日

全ビルマ僧侶連盟は、軍事政権を追放するため、「市民の結集」を呼びかける声明を発表し、「9月24日午後1時からの一斉行動」を国民に呼びかけた。[41]

調査団がインタビューを行った【僧侶2】は、全ビルマ僧侶連盟の対外的スポークスパーソンであった、として、以下のように証言した。

> 9月21日、BBCを通じて、僧侶連盟の中心人物である、**U Gambira**の声明、①国民の衣食住を安定させろ、②アウンサンスーチーを含む政治囚を釈放せよ、③燃料費の値下げをせよ、④民族・国民の和解を促進せよ、⑤（国民に対し）8時国営放送の時間にはそれを見ないで拘束されている人の無事を祈ろう、を読み上げた。

全ビルマ僧侶連盟は9月22日には、国民に対し「9月23日午後8時から戸口に出て15分間祈りを捧げるよう」呼びかけた。

---

[35] 2007年9月19日付読売新聞、http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews

[36] HRW quoted “Monks Bashed During September 18 Sittwe Protest” by Democratic Voice of Burma, September 22, 2007.

[37] Associated Press, September 18, 2007. HRW quoted “Monks March in Myanmar Amid Tight security at Temples.”

[38] 2007年9月20日付毎日新聞

[39]HRW報告書、赤津陽治http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews

[40]赤津陽治http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews

[41] 2007年9月24日付朝日新聞朝刊、赤津陽治http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews

その後も、ビルマでの抗議行動は全国各地で続き、22日には僧侶約500人[42]が、ヤンゴンのアウンサンスーチー女史自宅前に設置されたバリケードを通過し、同女史との対面及び同氏に対する約15分間の読経が許可された[43]。

2007年9月23日

推計約2万人（うち僧侶約3000人）のデモ隊がヤンゴン市内でデモを行い、アウンサンスーチー女史の解放と権力の委譲を求めた。その際、拳銃を持った治安部隊が出動した[44]。

2007年9月24日

ヤンゴン市内で僧侶・市民併せて10万人以上がデモに参加した。マンダレー、パコック、シットウェでも1万人以上の僧侶・市民が参加したデモが行われた。

シュエダゴン・パゴダ前には、国民的人気コメディアンのザーガナ氏と俳優チョー・トゥさんらが訪れ、水や食料などを僧侶らに差し入れた。軍政のトゥラ・ミン・マウン宗教相は、同日夜、国営テレビを通じ、今回の抗議運動を批判し「これ以上拡大すれば法律にのっとり処罰する」との警告を出した[45]。

25日付けNew Light of Myanmar紙は、9月24日命令93号が出され、僧侶が世俗的行為を行うことが禁止されたと報道した[46]。

2007年9月25日

ヤンゴン市内でデモが行われ、僧侶ら約4万人、市民ら約10万人計約14万人がデモに参加した。僧侶らは、シュエダゴン・パゴダに集まり、午後1時頃シュエダゴン・パゴダを出発し、「民主化を」「政治犯の解放を」などと声を上げながら市中心部を通ってスーレー・パゴダまで行進した。スーレー・パゴダ前では僧侶、1988年の民主化運動の際の学生リーダーだった活動家(88世代学生グループ)、国民民主連盟(NLD)のメンバーらがスピーチを行った。

同日朝、軍事政権は、ヤンゴン市内に広報車を巡回させ「5人以上の集会は禁止されている。デモ参加者には厳しく対処する。」「僧侶のデモは違法行為であるから参加しないように。」と、拡声機を使用して市民に呼びかけた[47]。

全ビルマ僧侶連盟と88世代学生グループは、国民に対し、経済の見直しや政治犯の解放等のために団結を呼びかける共同声明を出した[48]。

同日深夜、軍政はヤンゴンとマンダレーの2都市に対し夜間外出禁止令を出し、午後9時～午前5時までの外出を60日間禁止することを発表した。加えて、デモの拠点となっている6カ所の僧院には、ライフル銃や盾で武装した治安部隊を

---

[42]HRW報告書による。なお、アウンサンスーチー女史邸前バリケードを突破した僧侶の数は、朝日新聞によると1000人、日本経済新聞によると300人

[43] 2007年9月23日付朝日新聞、2007年9月23日付日本経済新聞、HRW報告書、赤津陽治 http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews

[44]HRW報告書、2007年9月24日付朝日新聞、2007年9月24日付日本経済新聞

[45] 2007年9月25日付毎日新聞、同日付朝日新聞、同日付神戸新聞、2007年9月26日付神戸新聞、同日付日本経済新聞、HRW報告書、UN報告書

[46]UN報告書

[47] 2007年9月26日付朝日新聞、同日付毎日新聞、同日付日本経済新聞、同日付神戸新聞

[48]HRW報告書

配置し、シュエダゴン・パゴダとスーレー・パゴダにバリケードを築いて封鎖した[49]。

Ⅴ　武力弾圧

2007年9月26日

1　著名人の拘束

同日未明までに、軍政は、デモを激励したことを理由に、国民的人気コメディアンのザーガナー氏やU Win Naing氏など著名人を拘束した[50]。

2　シュエダゴン・パゴダ前での弾圧

同日昼過ぎ、シュエダゴン・パゴダ周辺にデモを再開しようとして僧侶・市民500名を越す僧侶及び市民がパゴダに集まったが、[51]待機していた治安部隊が、同パゴダに集まった僧侶を包囲して、パゴダの中心部に入るのを阻み、僧侶・市民等に対し退去するよう命じた。

この命令に反し僧侶らがパゴダの中心に入ろうとしたところ、警察官らが警棒で僧侶らを殴打するなどの暴行を加え、多くの僧侶が重傷を負った上、軍政側は、僧侶をトラックに乗せて連れ去った。

暴動鎮圧部隊と国軍部隊は、デモ隊に対し、催涙ガスを流し、拳銃を何発も撃った[52]。一部の未確認情報【僧侶6】によると、発砲された催涙弾には毒がはいっていたとのことである。このときの政府側部隊の鎮圧により多くの僧侶が重傷を負った。また、【僧侶6】は、僧侶数人、市民数人がシュエダゴン・パゴダにおいて拘束され、多くの僧侶が重傷を負ったと証言している。目撃した市民【市民４】によると、目撃しただけで200人くらいの僧侶が殴られていたとのことであり、その後のデモでも同様の光景をしばしば目撃したとのことである。

調査団がインタビューした【市民6】は当時の状況を以下のとおり証言した。

> 26日は，軍が厳戒態勢を敷き，シュエダゴン・パゴダに一人たりとも僧侶が入れないようにしていた。
>
> 朝8時ころから，僧侶が集まってきたが，軍が土足で境内に踏み込んできて，僧侶らがパゴダの中心部へ入ることを許さなかった。そのため，シュエダゴン・パゴダの東門付近で，700人くらい僧侶が集まって読経をしていた。私は，僧侶らに水を差し上げたり，催涙弾に備えてマスクを渡したりした。バハン区の学生4,50人も一緒にその活動をした。
>
> 10時ころ，アーザニー（AR ZAR NI）通りから軍のトラックが5台ほどやってきた。軍に出ていくように命じられ，私たちはそこから離れたが，僧侶たちは残っていた。
>
> 私たちは，追い払われてパゴダから下って行き，境内の端で僧侶らの様子を見守っ

[49] 2006年9月26日付日本経済新聞 夕刊、同日付毎日新聞夕刊、2007年9月27日付毎日新聞、2006年9月26日付朝日新聞、HRW報告書

[50] 2007年9月26日朝日新聞朝刊、HRW報告書

[51] 2007年9月26日付日本経済新聞

[52] 2007年9月27日付朝日新聞、同日付毎日新聞

た。
10時半ころ，軍が，座して読経している僧侶にスピーカーで出ていくよう命じた。700人のうち200人ほどの僧侶は，東のチャウサディーパゴダまで，読経しながら進んでいった。
12時ころ，残りの僧侶に対し，警察が盾を使って強制排除しようとしたため，僧侶たちの多くは，私たちのほうへ下りてこられた。下りてきた僧侶に対しては，軍やSwan Arr Shinの車が，「ここにいないで戻れ」と呼び掛けていた。僧侶たちはその場で座って読経を続けた。僧侶たちは，軍の責任者に対して，「僧侶なのになぜシュエダゴン・パゴダでの行動が許されないのか」と抗議していた。
そこへ，警察，機動隊やSwan Arr Shinらがやってきて，笛を吹いて「読経をやめろ」と言い，僧侶たちに襲いかかった。
幼い見習い僧たちは，人の間をすり抜けて逃げて行った。現場には，3，40人の尼僧も含め，400人ほどの僧侶たちがいたが，軍は彼らに殴る蹴るの暴行を加えたうえ，車に乗せて連行していった。
私は、200人ほどの僧侶たちを避難させるべく、バハン区内のニャウンドン僧院につれていった。怪我した僧侶の中には，口から血を流している方もいて，私たちは僧院で懸命に介抱した。
ところが，ニャウンドン僧院を軍が取り囲み，7発ほどの催涙弾を撃ち込んできた。軍の仕打ちに怒り，興奮したある男性は，撃ち込まれた催涙弾を持って投げ返した。
当局は，車で僧らをシュエダゴン・パゴダまで送り届けると言ってきたが，私たちがその言辞を信用せずに拒否したところ，僧侶らに石を投げつけてきた。
私たちは，地元の人間だけが知っている秘密の逃げ道へ僧侶をご案内して逃がした。全員がその僧院から逃げた。15時ころのことだった。

また、同日シュエダゴン・パゴダに集まりデモに参加した僧侶【僧侶5】によると、政府が囚人らやUSDAのメンバーを使って、レンガのかけらを僧侶らに投げつけさせ、その結果、同人は左前頭部に意識を失うほどの重傷を負い、信者に運んでもらいその場を逃れたとのことである。同僧侶は治療のため入院をしたが、翌日政府が僧侶を探しにきていると病院関係者から聞き、病院の裏口から抜け出し、逃亡の末隣国タイに渡った。【僧侶5】の証言は以下のとおりである。

26日、シュエダゴン・パゴダから出てきたところを襲撃された。
政府は，収容されていた元囚人達やUSDAのメンバー達を使って，煉瓦のかけらを僧侶達に対して投げさせた。自分も左前頭部をけがした。意識を失うくらいの重傷だった。
怪我をした人間は，自分の近くだけでも4，5人，他にもたくさんいたと思う。

デモ隊は3ｋm離れたスーレー・パゴダに移動したが、スーレー・パゴダ付近においても、デモ隊は、機動隊とSwan Arr Shinのメンバーから暴行を受け、強制解散させられた。多くの市民が暴行を受けた[53]。
市西部のThakin Mya Park(タキン・ミャ公園)付近でも、国軍部隊とSwan Arr Shinによってデモ隊が足止めされ、デモ隊が、軍によって包囲され、

[53]HRW報告書、2007年9月27日付朝日新聞、同日付読売新聞

挟み撃ちとなった。兵士がデモ隊に実弾を水平発射し、逃げようとした市民ら少なくとも４人が銃撃された[54]。

目撃した市民【市民４】によると、銃撃されたのは、挟み撃ちにあったデモ参加者を助けようと、周辺の家から出てきて軍をとめようとした市民４～５名とデモ参加者１名とのことである。

【市民４】は、調査団に以下のとおり、証言した。

> 発砲も目撃しました。私が参加した行進が，アローカンナ通りに差し掛かったときのことです。
> このときの隊列は，僧侶は200人～300人くらい，一般人は200人程度でした。タキン・ミャ公園付近でのことです。この地で，軍隊が待ち構えていました。軍隊に西も東も挟み撃ちにされて包囲されていました。前にも後にも軍隊がいました。
> 私たちが困っていたところで，この地域の住民が出てきて，軍をくい止めてくれました。軍は直接乗り出して来ずに，まずSwan Arr Shinを前に出たせて，いざこざを起こさせました。そのため，Swan Arr Shinが住民とぶつかり，乱闘が始まったのです。Swan Arr Shinは棒を持ったり，手で殴りかかったりしてきたので，再び衝突が起きました。
> このいざこざは，市民の方が人数が多かったために，Swan Arr Shinが後ろに下がることになりました。軍は自分たちの隊列を崩さないために発砲を開始しました。
> 多くの住民は，住居の方へ逃げていきましたが，撃たれて倒れた市民もいました。
> 私が耳にした限りでも，4，5回の銃声を聞きました。
> 脇から出てきて軍を停めようとしてくれた市民の人で銃弾が当たった人は4，5人でした。デモ参加者も1人撃たれました。何発くらい発砲したかは分かりません。生死は分かりません。

報道によれば、同日の治安部隊とデモ隊との衝突で少なくとも３人の僧侶が死亡したとされている[55]。一方、複数の目撃証言と全ビルマ僧侶連盟の指導者によれば、同日の治安部隊とデモ隊との衝突で、５人の僧侶と市民２人が殺害された。殴り殺された人と射殺された人がいた。それ以外に、300 名以上が拘束された[56]。

軍政は、ヤンゴンとマンダレーにおいて、日没から日の出までの外出禁止令を発令。国連特別報告者によると、ヤンゴン地区コミッショナー自身が外出禁止令第 114 号を刑事訴訟法に基づき発令し、また、命令第１号は、同日発令され、その後命令第２号は、10 月２日、命令第３号は 10 月 12 日、命令第４号は 10 月 13 日に発令された。外出禁止令は２ヶ月間適用される予定であったが、10 月 20 日付の命令第５号により解除された[57]。

2007 年９月 27 日

１　僧院への襲撃

（１）襲撃の概要

---

[54] HRW 報告書、http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews

[55] 2007 年９月 27 日付読売新聞、同日付毎日新聞

[56] http://www.actiblog.com/burmamyanmarnews

[57] UN 報告書。BBC、 Mizzima; www.mizzima.com、 Swedish National Radio

9月26日の夜より、治安部隊による、シュエダゴン・パゴダをはじめとする僧院への襲撃が始まった。治安部隊は27日未明、少なくともヤンゴン市内の僧院3カ所を襲撃し、僧侶700人を連行した。襲撃の際には、僧侶に対する殴打、発砲、仏教施設の破壊が伴い、非常に暴力的であった。僧院の周辺には血痕が残り、割れたガラスやスリッパが散乱していた。[58]カチン州ミッチーナ、モーニン、バモー各郡の僧院も治安部隊によって襲撃された[59]。

襲撃にあった僧院の僧侶は拘束され、または還俗させられた。治安部隊は、僧院の襲撃の後、潜伏した僧侶を探すために近隣を襲撃し、潜伏を手伝った市民を逮捕した。

ヤンゴンでは深夜と早朝に、南オカラパ、北オカラパ、タームエ、ヤンキン、ティンガンジュン、バハン、Insein各区で僧院への襲撃があった。

（２）Ngwe Kyar Yan僧院(ングウェチャーヤン僧院)

ングウェチャーヤン僧院（南オカラパ区）は教学寺院として有名で、約350人の僧がいる。ここでは1988年の民主化運動時と同様に、僧侶がこぞって今回の抗議行動に参加と目されたため、特に軍政から狙われた。

27日早朝、20台以上のトラックに搭乗した兵士数百人が、僧院を襲撃した。兵士は僧侶に激しい暴行を加え、200人以上の僧侶を逮捕し、夜明け前に立ち去った。[60]僧侶たちは複数の僧侶が殴り殺されたと話した。

その後、 国軍部隊は再びNgwe Kyar Yan 僧院にきて僧侶を逮捕しようとし、市民側と衝突した。高校教師を含む7人が治安部隊の暴行又は銃撃により殺された[61]。

調査団がインタビューを行った【市民2】は以下のように証言した。

> 朝，ングウェチャーヤン僧院が襲撃されたというニュースを聞いたので，朝9時ころ友人と僧院へ行った。流血の跡などを目撃した。
>
> そのときは，もう軍隊はいなかったが，Swan Arr Shinと思われる人が1人陣取っていて，現場に来る一般人を「帰れ，帰れ」と言って追い払っていた。
>
> 僧院の門は普段は閉められている状態だが，ラジオ海外放送のニュースでは，その門を突破して軍が入ってきたとのことだった。門は軍が封鎖してしまい，境内にそもそも入ることができない状態だった。僧院の庭園に入る道に舗装されているところがあって，そのコンクリートの上に乾いた血だまりが残っていた。大きな血のあとだった。たぶん，僧侶が連れて行かれるときに，ここで殴られて，血を流したのだろうと思った。

[58] 2007年9月28日付毎日新聞
[59] 2007年9月27日付読売新聞
[60]HRW報告書、2007年9月27日付読売新聞朝刊、同日付毎日新聞朝刊、同日付朝日新聞朝刊
[61]HRW報告書

。

（３）その他の僧院への襲撃

南オッカラパ区では同日夜に、14番街のシュエヒンター教学寺院が兵士に襲撃され、地域住民が僧侶を守るために集まった。兵士は住民に発砲し、死者・負傷者数人が出た。兵士は70人の僧侶を連行したが、行き先は不明である。

ヤンキン区では深夜に、モーガウン僧院が同じような襲撃を受けた。兵士は僧院を制圧し、僧侶に暴行し、300人以上の僧侶を逮捕して、僧院内の大広間に拘束した。

バハン、ティンガンジュン、Insein、北オカラパ、タームエ区でも同日夜に、僧院が兵士による襲撃を受けた。いずれも教学寺院として知られており、各僧院には少なくとも200人の僧が住む。ここの僧侶も他と同じような形で襲撃を受け、数百人の僧が逮捕された。逮捕者は400人を超えると推計される[62]。

27日早朝、ヤンゴン管区司令官オンミン少将の指揮の下、国軍兵士はカチン州ミッチーナ、モーニン、バモー各郡の僧院を包囲した。兵士は敵陣を占領するのと同じようにして、扉を破壊して敷地内に入り、激しい暴行を加え、300以上の僧侶を連行した。この襲撃で少なくとも7人の僧侶が殴り殺されたと見られている。

２　軍の展開

9月27日、軍政は、僧侶と市民の集合地点であるシュエダゴン・パゴダや，デモの目的地のスーレー・パゴダなど、ヤンゴン市内全域の各要所に展開し、治安部隊の配置し、バリケードの設営し、主要な幹線道路を鉄条網で一部封鎖した(2007年9月28日付日本経済新聞）。そのため、同日にはヤンゴン市内各所において（シュエダゴン・パゴダ付近、バハン区、タームエ区、シュエゴンダイン、スーレー・パゴダ付近、ヤンゴン市庁舎前）、治安部隊とデモ隊との衝突が起こった。兵士が群衆に向けて自動小銃を発射したのは、パンソダン通り、シュエゴンダイン、スーレー・パゴダ前、アーロン区、チャイカサン・パゴダ付近、ティンガンジュン区、チャイナタウン、パズンダウン区、38番通とマハバンドラ通りの交差点であった。複数の消息筋によれば、この発砲で最低100人のデモ参加者が犠牲となり、数百人が逮捕された[63]。

３　スーレー・パゴダ付近における武力弾圧

昼頃スーレー・パゴダ付近において、大規模な市民に対する武力弾圧が発生した。スーレー・パゴダは軍によって包囲され、僧侶と市民らはパゴダに入ることができず、パゴダの手前に集まり、祈りをささげていた。治安部隊は、午後1時頃スーレー・パゴダとAnawratha Roadの交差点のあ

[62] ビルマ情報ネットワーク

[63] ビルマ情報ネットワーク http://www.burmainfo.org/politics/88GSG_200708.

たりに集まり、道路を封鎖し、市民集団に対し解散するように威嚇しながら近づいてきた。国軍兵士らが大量デモ参加者を強制解散させたが、この際、空中射撃をしたあと、デモ隊に向かって発砲し、日本人ジャーナリスト長井健司氏が死亡した。また目撃者によると、そのほかにも男女一人ずつ銃弾を受け、死亡した[64]。

調査団がインタビューを行った僧侶4、市民1-2および8 が目撃していた。

目撃者の僧侶【僧侶4】によると、兵士による発砲は威嚇ではなく明らかに市民を狙ったものであり、また兵士が長井氏と思われるビデオ撮影をしていたジャーナリストの男性に数回発砲した際、兵士と同男性の距離は3フィートほどの距離であったとする。

僧侶4は以下のとおり証言する。

> 軍が道をふさいだので，自分たちはアノーラター（Anawratha）通りとスーレー・パゴダ通りが交錯する角のところで座り込んだ。そこへ，僧侶の格好をした者が近づいてきたが，それは僧衣を来た兵隊であった（と思われる）。その僧衣を着た兵隊はパンソーダー（Pansodan）の方へ行ってくださいと言った。自分たちはすぐにパンソーダーの方へ行かずに，そのままそこに座って，経を唱え始めた。
>
> 自分たちは20分ほど経を唱えた。するとトレーダーズ・ホテルの方から軍の車が来て，催涙弾を発射してきた。
>
> その後2人の兵士が銃を構えて発砲した。それは威嚇ではなく，狙ったものだった。
>
> その銃弾のうち1発が，自分たちと行動をともにしていた僧侶の右肩に当たった。
>
> 彼は捕まって，ディガンジュンという場所に収容された。
>
> その場では長井さんとみられる日本人ジャーナリストも撃たれた。

4　タームエ第三高校前の弾圧

タームエ第三高校前に集まったデモ隊約を国軍部隊が包囲したところ、軍用トラック1台が突入してきて人々をはね、3人が殺害された。[65]トラックの荷台から降りた兵士は逃げるデモ隊に対し発砲し、複数の死者がでた模様である。HRWはこのときの衝突で少なくとも民間に8名の死者がでたことを確認している[66]。

最も若い犠牲者は15歳の学生だったという[67]。

目撃者の市民【市民3】によると、チャイカサン(Kyaik Ka San)広場周辺で、軍によって拘束された僧侶の釈放を求める抗議行動が行われ、その後にデモ隊がタームエ第三高等学校前を通りかかった際に弾圧が起きたという。AAPPは、弾圧後、おもにタームエ高校付近から72名が行方不明に

---

[64]HRW報告書

[65] デモ参加者の数はHRW報告書では2万人。ただし、目撃者の市民によると、行動に参加していた市民は2000-3000人であるという。

[66]HRW報告書

[67] AAPPからの聞き取り調査

なっていると報告しているが、実数はもっと多いと考えられる。ピニェイロ特別報告者は、少なくとも74名が拘束されたと認識している[68]。

デモ参加者である【市民3】の証言は以下のとおりである。

> 私たちは，（軍に）取り囲まれた。
> 行く先に防御線がはられていて，突破するか，それともバラバラになって逃げようかを話し合っていた。デモ隊が先に進むか引き返すか，どうするか相談していたところ，後ろからトラックが2台つっこんできて3人亡くなった。自分たちはバラバラになって逃げることにした。そこで，学校の中へ塀を乗り越えて進入して逃げようとしたところ，一緒に逃げようとした人の一人が後ろから銃で撃たれて亡くなった。もう一人は，学校に逃げ込もうとしたところ，道路と学校の間の溝に落ち込んでしまって，そこを撃たれてその場でその人は亡くなった。その場で以上のように，計5人が亡くなった。
> 私たちは，第三学校のすぐ近くにある民家の中へ逃げ込んだ。軍が「出て来い。出て来ないと撃つぞ。」と威嚇し，発砲していた。その時，下の階にいた人は皆拘束され（友人2人を含む，4，50人が連行された），自分たちは2階に行く階段のところで潜んでいた。下の階にいた4，50人のうちの一人が「どうしても行かない。」と言い，しがみついて連行に抵抗していたら，その場で発砲されて死亡した。銃は我々の方にも発砲されたが，我々には当たらなかった。
> 下の階の者を連れて行ったあと，軍隊が戻ってきて，2階の私たちに「下りてこい。」と言ったため，私たちは下りた。私たちは，第三高等学校の近くの路上にうつぶせにさせられた。うつぶせにされたのは，私たちやデモ行進に参加している人だけでなく，近くで取り巻いていた人も含め，およそ4，500人にくらいだと思われる。アスファルトに顔をつけられ，殴ったり蹴ったりの暴行を受けた。一人の女性は顔面を警棒で殴られて血を流していた。「闘うクジャクの旗（もともとは全ビルマ学生連盟の旗，シンボル）」や，携帯電話を持ち去られた。軍の偉い人が来て，「もう一度やると酷いことになるぞ」と言われ，その場で釈放された。

５　また、パンソダン陸橋で88世代学生グループの旗を掲げた学生が射殺された[69]。

2007年9月28、29日

軍政は、兵士や暴動鎮圧部隊、民兵組織の数千人をヤンゴン中に配備し、街頭の支配権を取り戻すことに成功した。彼らは、市民が街頭に集まろうとする気配を見せると、手当たり次第に暴行をし、実弾やゴム弾の発砲を行った。[70]治安部隊は、デモにかかわった僧院を襲撃し、僧侶の逮捕を続行し、数千人の僧侶を拘束し、僧院も占拠された[71]。

ヤンゴン総合病院からの情報によれば、9月28日、29日の2日間で遺体100体が収容された。医師の証言によれば、軍政はヤンゴン市内のすべての病院に対し、軍からの許可がある場合を除いて、負傷者の救援に救急車を使うことを禁止する命令を出した。憤った勇敢な医師がチョーミン保健相に抗議したが、指示に従うよう厳命された。

---

[68] UN報告書16頁
[69]ＨＲＷ報告書
[70]ＨＲＷ報告書
[71]ＨＲＷ報告書

2007年9月30日

同日夜、治安部隊はタケタ区の僧院襲撃を試みた。標的となった僧院はヤンゴン川に面しているため、治安部隊は川（ボート）と陸（トラック）の両方から僧院を攻めた。大勢の市民が僧侶を助けに出てきたが、結局、住民1人が殺害され、200人以上の僧侶が連行された[72]。

Ⅵ　その他の人権侵害

上記デモに対する弾圧に加えて、以下のような人権侵害が行われている。

1　僧院への襲撃[73]

ヤンゴンの僧院襲撃については前述したが、全国の52の僧院が襲撃されたとされる[74]。全国的に、特にヤンゴン、 Sittwe及びKachin州において、僧院が襲撃され、数千人の僧侶が拘束された。ヤンゴンの街頭で僧侶を見かけることはなくなり、襲撃を受けた僧院から僧侶はいなくなり、治安部隊が僧院を数週間占拠し、いくつかの僧院は現在でも占拠が続いている。僧院の包囲は継続して行われており、たとえば、11月27日には、当局によって、HIV/AIDS患者のケアを行うメギン(Maggin)僧院の閉鎖が命じられた[75]。

2　継続的な逮捕[76]

（1）概況

政府の弾圧後、治安部隊は、デモの際に収集した画像や情報をもとに、デモの主催者や参加者と疑われる者を突き止めて逮捕した。各区のPeace and Development Councilに各戸の住民の情報を写真と共に届出させ、また一晩でも滞在した者についても届出をさせた。Peace and Development Council、USDAおよびSwan Arr Shinに市民の監視を行わせることにより、政府は組織的にデモの主催者及び参加者の逮捕を行った。

ヤンゴンでは、ヤンゴン総合病院など病院に警察が詰めた。銃撃による負傷など、デモ参加によって負った可能性のあるけがで病院に来た者がいれば報告するように医者や看護師に指示している。

11月7日、New Light of Myanmar（政府系新聞）は、デモとその後の弾圧により、全国で2,927名が拘束され、うち91名がいまだ拘束中であると発表したが、ヤンゴンだけでも、逮捕者は2927名をはるかに上回ると考え

---

[72] ビルマ情報ネットワーク http://www.burmainfo.org/politics/88GSG_200708.

[73] HRW報告書81頁～

[74] Human Rights Council Sixth session Agenda item 4 “Human Rights Situations that Require the Council’s Attention”（以下「UN報告書」）17頁

[75] AAPPからの調査団聞き取り

[76] HRW報告書83頁～

られる。3000人から4000人が9月及び10月中に逮捕され、12月の時点で500人から1000人の間の人が拘束されているとするものもある[77]。

SPDCは被拘束者の居場所をその家族に伝えておらず、これは強制失踪を禁止する国際慣習法に違反するものである。

デモの参加者を逮捕できない場合、その家族を逮捕することが多い。そして、参加者が逮捕された後もその家族が引き続き拘束されることも起きている。

逮捕された通常の参加者や見物人の大部分は、数日から一週間で解放され、その際に今後の反政府運動や違法な活動に関与しない旨の誓約書に署名させられた。

12月に至っても、ほぼ毎日、逮捕活動が継続して行われた。

（２）僧侶に対する拘束

僧侶らは、僧院の襲撃後も、継続的に逮捕された。拘束された僧侶は、強制的に還俗させられ、身体的な虐待をうけ、長時間の尋問を受けている。

当局は、10月5日の時点で、533名の僧侶を逮捕し、うち398名は偽者の僧侶と判明して釈放し、21名はInsein収容所に拘束されていると発表している[78]。僧侶の一部は、拘束から解放されたが、治安部隊によって僧侶の身分を捨て、故郷に帰るように命じられた。また、SPDC支持者の修道長や報復をおそれる修道長が、抗議に参加した僧侶の帰還を拒むといったことも起こっている。

全ビルマ僧侶連盟の一員であった【僧侶2】は以下のとおり証言する。

武力弾圧の後、U Gambiraや自分も含めて6人の僧侶の写真が賞金付でUSDA等の組織に配られることになった。僧侶U Gambiraは、現在軍政によって逮捕され、国家反逆罪に問われていると聞いている。

（３）デモ参加者・民主化活動家の逮捕

当局はデモの際に撮影したビデオや写真を手がかりにするほか、地元のUSDAからの情報を使ってデモ参加者を探し出している。

調査団のインタビューに応じた【市民7】によると、僧侶のデモ活動を支援した嫌疑により一般市民も多く逮捕されており、シュエダゴン・パゴダの近くにあるバハン地区においては、町内の者をほぼ全員逮捕して尋問するということが繰り返されており、例えば、10月3日ころには、女性98人、男性105人ほどの一般市民が逮捕された。

調査団がインタビューした者のほとんどは、逮捕におびえ、または逮捕の現実的危険が迫ったために国外へ逃げた者である。

例えば【市民1】は、一般のデモ参加者であるにも関わらず、SPDCの指導者と警官が実家に訪れ、同人の行方を聞いてきた。家族に逃げろと諭され、国外に避難した。

[77] UN報告書12頁
[78] UN報告書18頁

USDAからの情報に基づいて10月9日にはパベダン区の若者10人が逮捕された。またサンチャウン区の国民民主連盟（NLD）党員の女性が10月11日に逮捕された。同じく10月11日の夜には男子学生4人と女子学生1人が逮捕された。

軍政はデモに参加した2人の活動家、テッテッアウン氏と夫のチッコーリン氏を探していたが、10月9日にチッコーリン氏が逮捕された。テッテッアウン氏が捕まらないため、当局は10月10日にテッテッアウン氏の母親（54）と義母（74）を代わりに逮捕した。テッテッアウン氏が出頭すれば母親と義母とを釈放するということだった。10月12日に義母が解放されたが、母親はまだ収容中といわれる。

88世代学生グループのフラミョーナウン氏が2007年10月10日に逮捕された。目の治療が必要になったために医者に行こうとしていた時だった。付き添っていた学生2人も逮捕された。フラミョーナウン氏は1988年の民主化運動の際の学生リーダーの一人で、1990年から1996年まで約6年間を政治囚として刑務所に収容されていた。

10月12日以後も民主化運動家の逮捕と拘禁が続いている。軍政は手配している活動家本人が見つからない場合にその家族を拘束して、本人に出頭させようとする手段にも出ている。

10月13日早朝、88世代学生グループの主要メンバーで、8月から当局が探していたテイチュエ氏が逮捕された。同じ家に隠れていた88世代学生グループのメンバー4人（アウントゥ、ティンティンエー、コーコー、ヘインテッ各氏）と、家の所有者（氏名は今のところ不明）も逮捕された。目撃者によれば、当局関係者約70人が家を襲ったという。

３　拘束先での虐待、非人道的取扱い[79]

拘束された者には、子供や女性も含まれている[80]。

（１）大規模な仮設の収容所

市庁舎

弾圧の直後は市庁舎が拘束用の施設として使用されていたが、その後、被拘束者はKyaik Ka San 競技場や国立技術高等専門学校（GTI）に移送され、現在、大規模の拘束には使われていないようである。

Kyaik Ka San 競技場

9月27日のタームエ第三高校の後に逮捕された者によれば、当時191名の男性、51名の女性が拘束されていた。被拘束者は少しの水しか与えられず、傷病者の手当ても行われなかった。

[79] HRW報告書90頁
[80] UN報告書13頁

治安部隊担当者は、HRWに、2名の被拘束者が、コンクリートの床で睡眠をとらされ、殴打されたことにより死亡したと告げている。ある被拘束者は、10月1日に、兵士が別の被拘束者を殴打し、死亡させたのを目撃し、また自身は、釈放される前に、自身の有罪を認めかつ当局を免責する旨の書面にサインをするまで厳しく殴打されたとHRWに報告している。

同競技場では、厳しい尋問は行われておらず、スクリーニングするための施設として使用されていたようである。

国立技術高等専門学校（GTI）

最大で数千人が拘束されていたと見られる最大の収容所。ピニェイロ特別報告者は警察から、9月27日から10月15日までの間に、1930人のデモ参加者が送り込まれ、そのうち80人がInsein収容所へ移送されたとの説明を受けた[81]。

収容の環境は、不衛生（トイレや風呂の施設が無い、あるいは不十分、手を洗うことも出来ない）、込み合った（9m×18mの部屋に190名が収容される）、コンクリートの床の上での就寝を余儀なくされ（死亡者が出た後に、後合板がしかれ、毛布が配られる）、水や食事も不十分であった。

デモ主催者とみられた男性が、腕立て伏せの姿勢でいることを強制され、崩れると棒で殴打された。反政府組織とみなされたアメリカンセンターのカードを持った学生は、長時間逆さまにつるされて顔を殴打された。

少なくとも2名が精神疾患にかかり、そのうち1名は死亡、1名は精神病院に収容された。他にも3名の被拘束者の死亡が目撃されている。ピニェイロ特別報告者は488名が病気であり、そのうち5名が救急の手当てのために中央病院に送られたとの説明を受けた[82]。約14名が死亡したとの証言もある[83]。

10月4日に100名が、10月6日には500名が釈放された。被拘束者は、釈放される際に、白紙に署名することを強制されているが、GTIの司令官に、将来抗議活動に参加しないこと、またGTI内で虐待を受けていないことを証言するものであるとの説明を受けている。

11月20日には、政府より、人道的な理由から、58名の被拘束者が解放された旨の報告がなされた[84]。

（２）Insein刑務所その他の収容所

反体制活動家や、抗議行動を主催したとみられる被拘束者は、仮設ではなく、Insein刑務所等の収容施設に収容され、反体制活動の多くは現在も収容中である。

[81] UN報告書13頁
[82] 同上
[83] UN報告書16頁
[84] UN報告書15頁

収容された者の中には、”Military Dog Cells” と呼ばれる２メートル四方の監房に８日間収容された者もいる。30匹の犬に囲まれ、換気施設やトイレはなく、コンクリートの床の上に薄いマットを引いて就寝し、三日に１度しか入浴できなかった。88世代の学生のリーダー達のほとんどは、独房に収容されていた。尋問の際、４日４晩休むことなく尋問されるなど、睡眠妨害が行われたり、手錠をしたままの尋問がされた[85]。National Coalition Government of the Union of Burma (NCGUB)との関連が見られる活動家に対しては、尋問の際に、殴打され意識を失う、圧迫姿勢を強要される（つま先立ちのスクワットで立ち、かかとの下に爪楊枝の刺さった石鹸を置かれる）といった虐待が行われたのが目撃されている。多くの被拘束者は、劣悪な拘束条件のために医療的なケアが必要であり不健康であった。特に88世代の学生の多くは弱っており、ほとんど歩けない状態であったという[86]。

そのほか、Thanlyinキャンプ、Shwe Pauk Kan キャンプ、Mawbi基地といった場所で[87]それぞれ数名から50名の拘束がされていたようであるが、拘束の状況は不明である。

最近釈放された人々からの情報によれば、僧侶を含むデモ参加者数人が収容中に死亡した。激しい拷問や、けがの治療を受けられなかったことが原因だった。亡くなった一人のタンアウン氏（48）はKyaik Ka San競技場にいたが、けがや内出血への治療を受けられなかったために９月30日に死亡した。

第３　政治犯の状況

１　AAPP（政治囚支援協会 Assistance Association for Political Prisoners 、略して「AAPP」という）[88]は2005年12月、元政治犯35人からの聞き取り調査を基に、「The Darkness We See: Torture in Burma's Interrogation Centers and Prison」（訳「私たちが見ている闇：ビルマの尋問センター及び刑務所での拷問」）を刊行し、ビルマ国内の刑務所及び尋問所で行われている拷問の実態を告発した。

---

[85] UN報告書16頁

[86] UN報告書14頁

[87] UN報告書13頁では、これら以外に、Thaynin 郡のPolice Centre No. 7 、Mayangone郡のAung Tha Paye、Hmawbe郡のRiot Police No. 5、MandalayのPlate Myot Police Centreが挙げられている。

[88] 政治囚支援協会は、1989年３月23日に軍政に拘束されたミンコーナインの拘束11周年を機に元政治犯により作られた組織である。政治囚支援協会は、以下のような活動を行っている。

① 政治犯とその家族の面会のサポート
② 食料や医療をいった政治犯が必要としているものを差し入れる
③ 刑務所の状況をモニタリングする
④ 拘束者、拷問、刑務所の状況、投獄されている政治活動家の生い立ち等の公表
⑤ アムネスティ・インターナショナル、国際赤十字、ヒューマンライツ・ウオッチ等の国際的な団体に対し情報を与える
⑥ 元政治犯が拷問や隔離により被った精神的肉体的ダメージに支援

軍事政権による民主化運動の弾圧以降、ビルマ国内では、政治信念や政治活動を理由として何千に者人々は逮捕され拷問を受け、長期間にわたり投獄をされてきた。それだけでなく、政治犯を釈放した後も、軍政は、彼らが２度と政治活動を行わないように様々な形の嫌がらせや脅しを行っている。特に、ビルマ国内において1988年の民主化運動の記念行事が行われる等、政治的に重要な時期には、軍政は、元政治犯を再逮捕し、取り調べ、何ら正当な理由もなく長期間にわたり拘束をする。軍政は、元政治犯を社会から孤立させるため彼らから就労する機会や教育を受ける機会を奪うので、元政治犯の生活は大変困難状況に置かれている。そのため多くの政治犯は国外に亡命せざるを得ない状況にある。

２　元政治囚からの聞き取り

ヒューマンライツ・ナウは、2007年９月および2008年２月に、AAPPを訪問し、政治犯の実態を調査した。ここでは二名からの聞き取りを紹介する。

1　A 氏

1993年７月，当時23歳の大学生だったA氏は、国民議会を批判する’New Journal’というパンフを出版したことが原因で逮捕・拘束された。逮捕直後の取調べでは、頭から布をかぶせられ、長時間に渡り複数の取調官から殴る蹴るの暴行を受け、昼夜わからない生活をさせられた。

彼はMI14尋問所において取り調べを受けたが、尋問の内容は、「誰にパンフレットを渡したのか」「誰がパートナーか」等であった。逮捕されてから２ヶ月後、裁判が開かれたが、弁護人はつけてもらえず、裁判官も軍服を着ていた。審理は１ヶ月間に６回開かれたが、１回30分程度のもので、尋問を多数されたがＡさんは弁解の余地はなかった。1993年10月半ば、緊急事態法71条（不法出版の罪）により、懲役12年に処せられた。

A氏はInsein刑務所に収容され、1997年に別の刑務所へ移管された。

A 氏によると、刑務所までの移管の際には、約6KGの足かせをつけられていたという。刑務所の衛生状態は大変悪く、コンクリートの上に竹でできた薄いマットを引いて寝かされたという。

刑務所内では、新聞や本を読むことが許されておらず、家族へ手紙を書くことも許されていないとのことであった。病気になっても医師に見てもらえない、食事も満足に与えられない状態であった（1999年にICRCが来て多少刑務所内の待遇は改善したとのこと）。また、看守に質問をした場合には、懲罰房に入れられ、看守から、殴る蹴るの暴行を受けたこともあった。Ａ氏は懲罰として、半年間ほど精神に異常を来し叫んだりしている囚人と一緒の房に入れられたこともあった。A氏は、2006年に釈放され釈放後直ぐにメイソットへ来てAAPPの活動に従事している。

2　B氏

B氏はアウンサンスーチー氏のボディガードをしていた人物であるが、逮捕直後の取調べの際受けた暴行により、片耳が難聴となっている。B氏も軍服を着用した裁判官による特別法廷における裁判を受けた経験を持つ。

3　その他の聞き取り

刑務所内は、衛生状態が大変悪く病気になりやすいといった環境の悪さもあるが、さらに男性政治犯に対し恣意的に女性の名前を付けて呼ぶなどして政治犯に対し精神的な屈辱感を与えたり、故郷と離れた刑務所に移し家族と面会をできなくし長期間拘束することで孤立感を味わせる等、政治囚に対し身体的なダメージだけでなく精神的なダメージを与えたりしている。また政治犯の額に水のしずくを一滴づつ長時間にわたり落とすといった拷問も行われている。

3　ビルマにおける政治犯の数

2007年8月5日時点で、ビルマの刑務所に収容されていた政治犯の数は1158人であった。

2007年9月の民主化運動後、軍政は4000人以上のデモ参加者を拘束した。軍政によって拘束された人々の内、3000人以上は既に釈放されているが、未だ700人ほどが拘束されたままである。

2007年9月の民主化運動前から拘束されていた政治活動化を含めると約1800人の政治犯が軍政によって拘束されている。

AAPPの話では、2007年9月の民主化運動以降に拘束された僧侶のうち、もっとも過酷とされるInseinに収容されている者が96名にのぼり、10名程の尼僧も収容されている。全ビルマ僧侶連盟のリーダーとされるU Gambira氏もInseinに収容されている。僧侶は、僧衣をはぎ取られ、暴行を振るわれるなどしており、また僧侶は人間でないことを理由として家族との面会を拒否されている僧侶もいるとのことである（AAPPの話では、ビルマでは刑務所に収容されている者の面会は家族に限られているとのことである）。

また、僧侶の中には、精神的に何ら問題がないにも関わらず、当局から精神に異常を来たしたとして精神病院に収容された僧侶もいる。

2007年9月の民主化運動後に拘束をされた政治犯のうち、300人以上が訴追されているという。AAPPから調査団が入手したリスト(罪名、氏名などが明確に特定されている者)には、2008年2月12日現在、訴追されて裁判中のデモ参加者133人が確定されている。これら氏名等の判明した裁判中の人々の内訳は以下のとおりである。

僧侶	25人
尼僧	9人
ＮＬＤ関係者	46人
88年世代	13人

4　拘束者に対する最近の状況

2008年4月1日までに、2007年9月の民主化運動に参加し軍政によって拘束された人々のうち、僧侶7名を含む約40人が、非公開の裁判により禁固刑に処せられた。40人の中には、デモ行進する僧侶に飲料水を手渡しただけの市民3人も含まれている[89]。

第4　難民およびメイソットに居住する人々の状況

1　弾圧から逃れた人々の状況

調査団が聞き取りを行った僧侶、市民たち以外にも、9月の武力弾圧以降、政治的迫害から逃れてタイ国境に避難した僧侶・市民たちは、相当数にのぼる。

しかし、彼らに対しては、難民としての保護が与えられていない。タイには国単位での難民認定手続が存在せず、タイ当局は、県単位での難民認定手続を2006年12月以降停止している。こうしたなか、これら迫害をうけた人々は民間団体の善意により一時的に匿われているものの、今後の生活の展望のない状況にある。とりわけ、ビルマにおいて、寄進行為以外に生活の糧を得る行為を禁止されてきた僧侶は、信仰を捨てて労働に従事するか、飢えるかの瀬戸際にたたされている。

また、2007年にメイソットに逃れてきたNLDなどの民主化活動家の多くについても、何ら難民としての保護が与えられず、不安定な生活を強いられている。

2　少数民族の難民

調査団は、メイソットのプロセシング・センターおよび四万人を収容するメラ難民キャンプを訪問した。メイソット近郊には、メラ、ウンピアム、ヌポの三つの難民キャンプが存在し、カレン族が居住している。ほかにもタイには、カンチャナブリ、メーホンソンなどに多数の難民キャンプが存在する。

少数民族の多くは軍事政権から迫害を受け、軍事政権と少数民族の武装組織との間、また民族の武装組織どおしの戦闘から逃れてきた者たちである。

メイソット地域のカレン民族に関しては、米国が大規模な第三国定住プログラムを実施中であり、また、他の欧米諸国も小規模ながら第三国定住を実施している。

戦火や迫害を逃れた難民のなかには、難民キャンプにおいて保護を受けることなく、女性団体が運営するシェルターに保護されたり、移民として働く者も少なくない。

調査団が聞き取りを行った難民の中には、例えば以下のような人々がいる。

<u>カレン族　少女</u>

父親がカレン民族同盟の活動に従事していたことが軍事政権に判明し、父親が逮捕されそうになったため、家族で国境を越えて逃げてきた。

<u>カレン族　男性</u>

長年、軍事政権に徴用されて強制労働に従事してきた。

---

[89] アムネステイ・インターナショナル・プレスリリース
http://www.ne.jp/asahi/liberal/peace/20g-main.html

自分の住む村が軍事政権とカレン族の戦闘地域になり、軍事政権は、村の周囲を全て地雷で取り囲んだ。そのため、村への出入りが出来なくなり、村から外出しようとしたり、外出から村に帰ってこようとする人々が次々に地雷を踏んで命を失ったり足を失うなどした。このままでは命が危険にさらされ、到底、生活をしていくことは困難だと考え、国境を越えて難民キャンプの保護を受けた。

カレン族　女性

14歳の時にビルマを脱出してタイに来た。軍事政権から少女がレイプされるという事件が続いていて、このままビルマにいるのは嫌だと想い、難民キャンプとビルマを行き来しているカレン族の人について国境を越えた。弟も軍事政権に少年兵にとられたくない、と考えてついてきた。他に、5,6人の少女が一緒に国境を越えた。

カレン族　女性

SPDCはカレン族をポーターとして強制労働させる。女性はポーターとして徴用され、昼間は軍の荷物運びをさせられ、夜はレイプされる。カレン民族同盟のために働いていた看護婦が、軍事政権にレイプされて殺されたのを知っている。

15歳のとき、叔母と一緒にサルウィン川を渡ってタイ側に来た。自分のいた難民キャンプがカレン民族同盟の分裂に伴う戦闘に巻き込まれ、キャンプにとどまることが出来なくなり、バンサラーの難民キャンプに移動した。しかし、2002年にはバンサラーの難民キャンプは洪水被害にあって、多くの人が亡くなった。移動せざるを得なくなり、今は看護婦としてメイソットで働いている。

カレン族　女性

ビルマ軍から恒常的にポーターやその他の強制労働に従事させられてきた。女性であったことから、昼間は強制労働、夜は兵士からレイプされた。

ビルマ軍がカレン族から攻撃を受けると、ビルマ軍が報復にやってき暴行をされたり殺されたりしていた。

2007年12月25日、ビルマ軍は、自分たちが居住していた村を攻撃してきた。

夫はビルマ軍に逮捕されてしまったが、幼い子ども3人と母親、姪をつれて村の人々とともに逃げてきた。

2008年1月4日にメラキャンプに到着した。

さらに、調査団は、メラ難民キャンプの病院には、戦闘に巻き込まれて地雷で足を失ったり、撃たれて負傷する人々が手当てを受けている人々に出会ったが、そうした戦闘の犠牲になった負傷者は常に存在するとのことである。

3　超法規的殺害

メイソットに居住する、カレン民族同盟の事務局長、マンシャー氏は、調査団の滞在中の2月14日に自宅で暗殺された。犯人は特定されていないが、

民主化運動の指導的立場にあるマンシャー氏に対する超法規的殺害は極めて重大な問題であり、民主化運動に対する最悪の形態の弾圧である。

第５　ビルマ情勢に関する日本政府及び国連の対応

１．日本政府

2007年9月25日、外務省の外務報道官は、同年8月以降のビルマ情勢の緊迫化を受け、ビルマ政府が冷静な対応を取ること及びビルマ政府が国民和解、民主化に向けた対話を含む真剣な取組を行うことを期待する旨の談話を発表した。長井記者の射殺を含む更なる緊張の高まりを受け、9月28日に外務省内に「ビルマにおける騒擾事件に関する連絡室」を立ち上げ情報の収集に当たるとともに、「ビルマにおける騒擾事件に関する連絡会議」を開催し、ビルマ情勢の分析および今後の対応について検討を行った。また、ニューヨークにおいて国連総会に出席中の高村外務大臣は、同日、ニャン・ウィン・ビルマ外相と会談を行い、邦人の死亡に遺憾の意を示すとともに、真相究明を求めた。更に、人権状況については、ガンバリ国連事務総長特別顧問の訪問時に具体的な改善を示すことを求めることを含め、民主化プロセスの進展、平和的デモへの強圧的対応の撤回、拘束者の釈放及び対話を通じた事態の収拾を要請した。

日本政府は、2008年9月末から11月にかけて、外務審議官の現地への派遣、ビルマを含む関係各国との首脳・外相レベルでの会談を行い、邦人死亡の真相の究明、カメラ等の返却、デモに対する自制した対応、拘束者の釈放、民主化勢力との対話を求めている。また、2008年1月17日に東京で行われたビルマ外相との会談では、高村外務大臣が、民主化、人権状況の改善に対する思い切った取組の要請、ガンバリ国連事務総長特別顧問の早期訪問の受け入れ、日・ビルマの専門家を含めた形での邦人死亡に関する真相究明を要請している。

しかし、事態は進展しておらず、日本政府はその後、ビルマ民主化に向けて主体的役割を果たしていると評価することは困難である。

なお、日本はビルマに対する主要援助国のひとつでありであり、近年も、草の根無償援助のスキームで、弾圧に関わったUSDA、ミャンマー母子福祉協会などの体制翼賛団体の活動を経済支援してきた。対ビルマODAに関して日本政府は見直しをする旨表明しているが、その結果は明らかでなく、上記草の根無償支援を打ち切ったとの表明はなされていない。

日本政府が50%出資する日石ミャンマー石油開発株式会社は、ビルマ沖天然ガス田（イェタグン田）の権益を取得しており、それをJBIC(国際協力銀行)が支援してきた。日石ミャンマーは、イェタグンでのプロジェクトから撤退していない。[90]

[90] メコン・ウォッチ　「ビルマ沖天然ガス田開発に日本政府も関与」

２．国連

2008年８月以降のビルマ情勢の緊迫化及び人権状況の悪化を受け、ピニェイロ国連調整官は、同年８月及び９月に、平和的なデモに参加し当局に拘束されている者の釈放を求め、民主化を求める勢力との対話を求めた。国連は、10月２日、「ビルマの人権状況」に関する国連人権理事会特別会議を開催し、国連の人権理事会第５回特別会期は、2007年10月、民主化勢力の釈放と、すべての勢力との民主化にむけた対話などを求める決議を採択した。

10月11日には、国連安保理議長によるビルマ情勢に関する声明を発表し、12月７日には、ピニェイロ国連特別報告者によるビルマの人権情勢に関する報告書を発表した。

国連よりは、ピニェイロ特別報告者が11月にビルマに訪問しビルマ政府関係者と会談した他、ガンバリ国連事務総長特別顧問が2007年９月、11月及び2008年３月にビルマを訪問している。

ピニェイロ氏は、2008年２月８日に声明を出し、その中で、ビルマで民主化を求める活動家が、引き続き逮捕され、拘留され、投獄されている状況に関し憂慮の意を示した。これらの国連での活動に対し、ビルマ政府代表は、３月17日に開催された国連人権理事会において、ピニェイロ報告書には噂や信頼できない筋からの情報に基づく非難が含まれており、実現性のない勧告が含まれているとしている。

国民投票をめぐる動きについては後述する。

第６　ビルマの国民投票・総選挙について

軍事政権はこの２月、2008年５月に憲法国民投票をおこない、2010年に総選挙をおこなう、というロードマップを唐突に発表した。

しかし、調査団は、民主化勢力・少数民族グループとの対話およびその後の推移を通じ、このプロセスに重大な問題があることを認識した。

第一に、1990年に選出された国会議員の意向を無視して、憲法起草、総選挙をおこなう、ということになれば、プロセスそのものの正統性に重大な問題がある。

第二に、憲法草案は、その内容上も重大な問題が存在する。
まず、外国人と結婚した者は被選挙権がない、として、民主化指導者アウンサンスーチー氏は総選挙のプロセスから完全に排除されている。

また、

440名を定員とする全国議会において、110名は軍の推薦を受けた者が占めることとされ、地方・州代表の議会についても168名中56名は、軍の推薦によって選ばれるとされる(草案第四章)。大統領・副大統領の選出には軍が関与するとされており(草案第三章)、民政への意向とは評価できない。

さらに、基本的人権については、国家秩序と法律の範囲内でのみ認められる、とされている(草案第八章)。第１で紹介したとおり、ビルマには多くの政治犯を投獄する根拠となっている弾圧立法が存在し、今回の弾圧では現実に、これら法律が発動され、平和的な民主化活動によって拘禁、懲役刑、そして射殺などが行われている。そうしたことを可能とする根拠法を残したまま、「法律の範囲内」で人権保障をするとの条項には何らの意味もなく、人権侵害は、憲法制定後も永続する危険性が極めて高い。

第三に、国民投票、選挙の過程で、投票の自由、選挙活動の自由が保障されるとは到底いえず、公正な国民投票・公正な選挙を実現することは現状では極めて困難な状況にある。最近公表された国民投票法は、国民投票を妨害する言動・活動は懲役刑の対象とされており、軍事政権の提案する憲法の正統性を問うあらゆる活動が抑圧の対象となる危険が高い。また、多くの民主化活動家が投獄され、そしてその根拠となる弾圧立法が廃止されないまま、自由の保障のない総選挙が行われても、公正な結果をもたらすとは到底いえず、アウンサンスーチー氏が選挙プロセスから排除されていることも重大である。さらに、政治犯も含めて犯罪歴のある者や宗教者、健全な精神の持ち主でない者(unsound mind) は総選挙で投票資格がないとし(草案第九章)、恣意的に民主化勢力を総選挙のプロセスから排除する危険性が高い。

以上のとおり、現状のまま軍事政権の提案する憲法国民投票、総選挙が進められれば、真の民主化を実現しえない重大な危惧がある。

国連事務総長は、軍事政権の発表を受けて、「全ての憲法草案がミャンマー全国民の意見を広く反映するものになるよう、ミャンマー当局に対して憲法制定のプロセスを包括的・参加型・透明性のあるものにするよう」要請し、「国民和平のプロセスとして、アウンサンスーチー氏および各政党との実質的対話を、期限を定めて速やかに行うことが重要だと益々確信する」旨のステートメントを発表し、アウンサンスーチー氏を初めとする民主化勢力との対話に基づく民主化プロセスとするよう求めた。[91]ガンバリ特使は３月の訪問で軍事政権に憲法の修正を求める国連事務総長の書簡を渡したが、軍事政権は憲法の修正を拒絶した。

現在ビルマ国内では、憲法国民投票にボイコットを呼びかける民主化活動家が相次いで逮捕・投獄されている[92]。

軍事政権は、今回の弾圧で主導的役割を果たした体制翼賛会、USDA を政党となるべく育成しており、2010 年の総選挙において、この団体を第一党として軍事政権を事実上延命させようと考えていると見られている[93]。

第７　ビルマの現状の事態のための日本社会がなすべきこと－

[91] 2008年2月11日　UNニュース
[92] BP Update, Kim Ohmar
[93] Burma Lawyers Council, NCGUBなどと調査団の懇談

以上の調査結果を受け、ヒューマンライツ・ナウは、以下のステートメントを発表した。

記

人権団体ヒューマンライツ・ナウは、2008年2月8日より14日まで、昨年9月に民主化運動が武力弾圧されたビルマの人権状況を調査するため、タイ・ビルマ国境メイソットに滞在し、事実調査をおこなった。

1　人権侵害の状況

私たちは、9月の抗議デモに参加した僧侶、市民計十数名から事情聴取をおこなった。彼らはいずれも昨年9月の民主化デモへの参加を理由に軍事政権の治安当局から逮捕される危険にさらされ、国内からタイに避難せざるをえなかった人々である。これらの人々の証言は、9月の武力弾圧に際し、著しい人権侵害が発生したことを告発するものであった。

平和的な抗議行動に対し、軍・治安部隊が容赦なく発砲、市民を意図的に殺傷した事実が明らかになった。弾圧を行ったのは、軍、警察、機動隊のほか、民兵として、「連邦連帯開発協会」（Union Solidarity and Development association、略してUSDA)及びSwan Arr Shinがある。後二者は、直接的な暴力行為を僧侶・市民に対しておこなったほか、とりわけUSDAは、デモに参加して混乱をつくりだし、情報をさぐるスパイとして、またデモに参加した者をさがしまわる密告者として弾圧に不可欠の役割を果たした。

軍政はデモ参加者約4000人を拘束、そのうち3000人以上は釈放されているが、約700名が未だに収容され続けているという。その以前からビルマには、1100名を超える政治犯が身体拘束をされていたものであるが、現在、政治的な活動に参加した、という理由で拘束されている人々は1800名を超すことになる。

ビルマで最も過酷な政治犯収容所といわれているInsein収容所には、96名の僧侶と10名程の尼僧も収容され、僧侶は僧衣をはぎとられ、暴行を受け、家族との面会もまったく許されていないという。これら僧侶・市民らは、平和的な行動に参加したという理由のみで、拘束さけ続け、300人以上が訴追されているという。武力弾圧後の国際社会の非難にも関わらず、人権抑圧の事態は改善されていない。

2　難民の状況について

ところで、上記のように政治的迫害を受けて、タイ国境に避難した僧侶・市民たちは、難民としての保護が与えられていない。

タイには国単位での難民認定手続が存在せず、タイ当局は、県単位での難民認定手続を2006年12月以降停止している。こうしたなか、これら迫害をうけた人々は民間団体の善意により一時的に匿われているものの、今後の生活の展望のない状況にある。とりわけ、ビルマにおいて、寄進行為以外に生

活の糧を得る行為を禁止されてきた僧侶は、信仰を捨てて労働に従事するか、飢えるかの瀬戸際にたたされている。

私たちは、タイ当局が一日も早く彼らに難民としての保護をあたえるよう期待するとともに、これら難民に対する国際社会(民間も含め)の支援が重要であると考える。とりわけ、日本政府は、難民の第三国定住をすみやかに導入し、軍事政権に政治的に迫害されて故国を追われた人々や、迫害・戦禍を逃れてきた少数民族出身者を、積極的に難民として日本に受け入れ、保護していくべきである。

また、こうした人々が日本にたどりついて難民認定申請をした場合も、広く難民として保護すべきである。

3　ビルマの国民投票・総選挙について

軍事政権はこの2月、2008年5月に憲法国民投票をおこない、2010年に総選挙をおこなう、というロードマップを唐突に発表した。

しかし、調査団は、民主化勢力・少数民族グループとの対話およびその後の推移を通じ、このプロセスに重大な問題があることを認識した。

第一に、1990年に選出された国会議員の意向を無視して、憲法起草、総選挙をおこなう、ということになれば、プロセスそのものの正統性に重大な問題がある。

第二に、憲法草案は、その内容上も重大な問題が存在する。まず、外国人と結婚した者は被選挙権がない、として、民主化指導者アウンサンスーチー氏は総選挙のプロセスから完全に排除されている。440名を定員とする議会において、110人は軍の推薦を受けた者が占めることとされ、民政への意向とは評価できない。さらに、基本的人権については、現行法の範囲内でのみ認められる、とされ、多くの政治犯を投獄する根拠となっている弾圧立法による人権侵害は、憲法制定後も永続する危険性が高い。

第三に、国民投票、選挙の過程で、投票の自由、選挙活動の自由が保障されるとは到底いえず、公正な国民投票・公正な選挙を実現することは現状では極めて困難な状況にある。最近公表された国民投票法は、国民投票を妨害する言動・活動は懲役刑の対象とされており、軍事政権の提案する憲法の正統性を問うあらゆる活動が抑圧の対象となる危険が高い。また、多くの民主化活動家が投獄され、そしてその根拠となる弾圧立法が廃止されないまま、自由の保障のない総選挙が行われても、公正な結果をもたらすとは到底いえず、アウンサンスーチー氏が選挙プロセスから排除されていることも重大である。

以上のとおり、現状のまま軍事政権の提案する憲法国民投票、総選挙がすすめられれば、真の民主化を実現しえない重大な危惧がある。憲法起草・確定の過程は、軟禁中のアウンサンスーチー氏をはじめとする拘束されているすべての民主化勢力を釈放したうえで、民主化勢力との少数民族との対話のもとに行われなければならない。

国連の人権理事会第５回特別会期は、2007 年 10 月、民主化勢力の釈放と、すべての勢力との民主化にむけた対話などを求める決議を採択した。軍事政権の一方的な憲法制定プロセスは、同決議が示した国際社会の一致した意志に反するものである。

国際社会は軍事政権による一方的なプロセスの強行を傍観せずに、いまこそ一致した声をあげることが求められている。

日本政府に対しては、アジアの一員として、とりわけアジア選出の人権理事会理事国として、現在軍事政権の方針に明確な反対の意志を表明し、民主化の実現のために積極的な役割を果たすことを求める。

氏名：　SABAI
性別：　女性
年齢：　30 代
職業：　医師

１　過去の民主化活動の経験・内容・参加の経緯

1996 年医学生だったころ学生運動に関わった。軍事政権が活動に参加した学生を逮捕拘束していたことから、2 ヶ月間マハージー・メディテーション・センターに身を隠していた。大学は 2 年間閉鎖された。

1998 年、大学が再開されるにあたり、学生リストに名前がなかったことから理由を尋ねたところ学生運動に参加したことが原因だった。その後、大学当局からインタビューを受け「今後２度と政治活動を行わない」旨の書面に署名して大学に戻れた。以後政治活動には携わらなかった。

その後、医師として HIV 患者の診療に携わってきた。アラカン州の診療所で２年間、その後ラングーンの診療所で２年間治療にあっていた。

２　今回（2007 年９月）の活動に参加した期間

9 月 21 日～24 日は休暇だったことからシュエダゴン・パゴダに行き僧侶に水をあげたり医療を必要としている僧侶の手当を行った。僧侶の隊列には加わらず端から祈りを捧げた。

27 日には夫と妹とともにデモに参加した。

３　目撃した人権侵害の要約

21 日乃至 24 日については特になかった。

27 日は当局が早朝僧院を襲ったという話を聞いたことから、夫と妹とともにデモに参加することになった。

ジャクソン・パゴダでデモが行われると聞き、午前 10 時頃ジャクソン・パゴダ近くに行ったが、ジャクソン・パゴダには既に兵士が何名かおり、僧の姿はなかった。

1 時間ほどジャクソン・パゴダ周辺にいたが、夫の友人から携帯電話に連絡が入り、スーレイ・パゴダにたくさん人が集まっていることを告げられた。夫と妹と共にタクシーに乗り、トレーダーズホテル付近に行った。午後 0 時頃トレーダーズホテル前に到着した。

僧の姿はなく市民だけが集まっていた。最初はお互いにスパイではないかと観察していたが、一人が「アウンサン将軍の軍隊訓練は市民を殺すためではなかった。僧侶を殺すためではなかった。人々を殺すな。僧を殺すな 」と のスローガンを叫び始めた。それをきっかけに人々が叫び始めた。人々は 1 時間ほど継続的に叫んでいた。ジャーナリストや外国人が写真を撮っていた。人々は叫びながら僧侶が来るのを待っていたが、僧侶は数人しか来なかった。

警察署の前でスローガンを叫んでいたこと、トレーダーズホテルの方から軍隊のトラックが

Copyright 2008, Human Rights Now. All Rights Reserved

やって来たことから、夫と場所をアノーラター通りへ移動した。

移動していたところ銃声を聞いたが、大変混雑していたことから、何処から発砲されたのかは判らなかった。

銃声を聞き一部の人が走り始めた。すると、「恐れるな。威嚇射撃だ。空に向かって撃っているだけだ。」という声がした。それでも一部の人が走って逃げようしていたことから「走るな。逃げるな。走って逃げている人を狙って撃っているから逃げるな」との声が聞こえた。銃声が聞こえ始めたのは午後 1 時 15 分頃で、トレーダーズホテルの方からトラックが来て 1 分程だった。

通は人であふれかえっていたことから、私は逃げることができなかった。すると今度は、「逃げろ。彼らは人々を狙って撃っている。座るな。人々を捕まえている。叩いている」との声が聞こえた。

私は逃げようと思ったが、人並みに揉まれて浮き上がった状態だったことから逃げることができず、その場に転倒した。人々が私を踏み台にして逃げていった。

私が倒れたことに気が付いた夫は私を助け起こしてくれた。夫と共に逃げたが、逃げる途中に 3 人倒れている人を見た。

34 通りのビルの一つに入り階段の所に身を潜めていた。このビルの階段には、大勢のデモ参加者が逃げ込んでいた。

ビルの外から SPDC が「勇気があるなら出てこい」と言って叫んでいた。

ビルに住んでいる人々が外の様子を見てくれもう帰れると言われたので帰宅した。15 分から 20 分ほど隠れていた。

28 日にもデモに参加しようと思ったが軍隊が市民を弾圧していたのでできなかった。

４　事件後メイソットへ来る経緯

10 月 4 日には仕事に戻った。何千人もの人々がデモに参加していたことから、当局が自分を逮捕しに来るとは思わなかった。妹は政治活動家なので隠れていた。

10 月 11 日、妹から連絡が入り、実家にある英語の本を取ってきて欲しいと頼まれた。そのため、実家に行き、本を取って姉の家に帰った。その直後、SPDC の指導者と警官とＳＰが実家にやってきた。患者の兄弟の SPDC メンバーの一人が姉の家にやって来て「逃げなさい」とアドバイスしてくれた。

夫の所へも SPDC のメンバーがやって来て、妻を知らないかと聞かれた。

それから妹と一緒の所に隠れていた。

10 月 15 日に夫と共にヤンゴンを出発して、18 日にコタに到着した。ヤンゴンから来た人々を当局が探していたことから、小舟に乗って国境を渡りタイに入りバンコクに行った。23 日にメイソットに到着した。

５　現在の状況

夫と共にメイソットで静かに生活をしている。ＵＮ HCR の slip の発行を受けているが、自分たちの将来について考えることができない。

Copyright 2008, Human Rights Now. All Rights Reserved

市民２　（Ｙ氏）

氏名：　Ｙ氏
性別：　男性
年齢：　30代
職業：　工場経営
出身地：ヤンゴン

１　過去の民主化活動の経験、内容、参加の経緯

88年のときはまだ小５だった。

96、98年に学生運動に参加した経験あり。

96年の運動はヤンゴン工科大学中心に始まったのだが、私はそのとき、拘束された学生の釈放要求にかかわった。当時、私は大学生だった。

その活動の際、医科大学の学生だった妻と知り合い、2007年１月に結婚した。

98年のときも、同じく釈放要求に関わった当時は、DPI（国立美術高等専門学校）の学生だった。

いずれの運動のときも、逮捕はされなかったその後、今回までは一切活動してこなかった。

２　今回（2007年９月）の行動に参加した期間

９月25日から参加した。

３　目撃した（体験した）人権侵害の要約

（１）25日

政府の姿勢が極めて厳しくなってきたので、25日、一人でも多く参加することで、抗議行動を盛り上げたいという気持ちで立ち上がった。妻とも話し合ったが、妻も戦う気持ちを持っていた。

シュエダゴン・パゴダで、12時ころから僧侶の行進が始まったが、僧侶の両側を、他の市民と手をつないで行進し、お坊さんたちを襲撃から保護する役割をした。

その日は、当局からの弾圧はなかった。

私は、自分の地区の友人７、８人と行動に参加した。行進に参加したのはそんなに長い時間ではない。

（２）26日

仕事があったので、ほとんど活動に参加することはできなかった。

朝、シュエダゴン・パゴダで僧侶が襲撃されたというニュースを聞いた。私の工場の近くに何人か僧侶がやってきたので、僧侶を襲撃から守るため、一時的（15分～20分くらい）に行進に参加した。

（３）27日

妻とともに活動に参加した。

朝、ングウェチャーヤン僧院が襲撃されたというニュースを聞いたので、午前９時ころ友人と僧院を見に行った。流血の跡などを目撃した。

私が僧院を訪れたときには、もう軍隊はいなかったが、Ｓｗａｎ　Ａｒｒ　Ｓｈｉｎと思われる人が１人陣取っていて、現場に来る一般人を「帰れ、帰れ」と言って追い払っていた。現場には５分くらいいた。

僧院の門は普段は閉められている状態だが、ラジオ海外放送のニュースでは、その門を突破して軍が入ってきたとのことだった。ングウェ

Copyright 2008, Human Rights Now. All Rights Reserved

チャーヤン僧院の門は軍が封鎖しており、境内に入ることができない状態だった。僧院の庭園に入る道の舗装されているところがあって、そのコンクリートの上に乾いた血だまりが残っていた。大きな血のあとだった。たぶん、僧侶が連れて行かれるときに、ここで殴られて、血を流したのだろうと思った。僧侶の姿はなかった。

午前 11 時頃、妻と喫茶店で待ち合わせして、妻と妻の妹と合流した。

その後チャイカサン・パゴダに行ったが、軍が、市民が中に入るのを禁止していた。その後 12 時過ぎにスーレー・パゴダへ行った。

スーレー・パゴダ周辺には多くの市民が集まっていて抗議の声をあげていた。スーレー・パゴダに行く道は当局によって既に封鎖されていた。

そのうち僧が 5、6 人やって来て市民と合流した。

軍や警察もいたが、特に手出しすることはなく、ずっと見ている状況だった。

トレーダーズホテルの方向からスーレー・パゴダの方向に、軍の車が 2 台右折してきた。私は軍の車が来たので場所を変えようと移動し、そのときに軍の車が 1 台通過したのを振り返って見た。

そのあと、2、3 発の銃声が聞こえた。

それから 4、5 秒して 10 数発の銃声が聞こえ、群衆が逃げ出した。私は後ろから押されて倒れた。妻も後ろの人に押されて倒れ、下半身は倒れた人に挟まれて動けない状況だった。妻を引っ張り出して、一緒に逃げた。

私たちは 38 番街を左折して、そこにあった建物に逃げ込み、6 階建ての建物の最上階まで駆け上がって、階段の踊り場のようなところに 30 分ほど身を潜めた。

その後、家に戻る途中、信号のあたりで撃たれて血を流している人を見た。友人 2 人が肩を貸して、その人を抱えて逃げてきていた。

４　事件後メイソットへ来る経緯

10 月 11 日、妻の実家に当局がやってきて、妻を逮捕しようとした。

そのとき妻はいなかったため、私は妻の居場所を聞かれたが 「夫婦喧嘩して、どこかへ 行った」と答えた。妻のパスポートを提出するよう要求されたが、あなたが何者か信じることはできないなどと言って渡さなかった。

しかし、当局は、私の家や妻の実家などを家宅捜索するなどして、強制的にパスポートを取り上げるだろうと考え、そうなれば、自分や妻だけでなく、妻の兄弟にも迷惑がかかると思った。

そこで、妻の実家に戻って、当局の人に、「明日、地区評議会の事務所でパスポートを渡す」と約束し、翌日パスポートを提出した。

私は、身に危険を感じ、権力者とつながりのある知り合いなどに相談したところ 「軍事 政権は自分のしたいことをしたいときにすることができるのだから、無駄な抵抗をしないほうがいい」との助言を受けた。

そこで、10 月 15 日にヤンゴンを脱出し、小舟に乗って川を渡る等をして、22 日にメイソットへ到着した。

５　現在の状況

家族とは直接連絡が取れない状況である。

96 年の抗議活動の際、政府が記者会見をしたときに、私の写真も報道されたのを見た。私はその時から既に軍政に特定されていると思うので、今回のことが加わって、国に帰れば逮捕されると思う。

今回は、妻と一緒に参加していることでも目立っていると思う。

Copyright 2008, Human Rights Now. All Rights Reserved

市民３　（Ｓ氏）

氏名：　Ｓ氏
性別：　男性
年齢：　21
職業：大学生

１　過去の民主化活動の経験・内容・参加の経緯

（１）過去の経験

過去に、学生運動歴はなく、今回が初めてである。

（２）内容

最初はお坊さんたちの隊列を守る運動として参加していた。途中から、お坊さんたちに水を差し上げたり、具合が悪いときにはその世話をしたりする仕事をするようになった。

（３）　参加の経緯

バズンタウ地区の学生およそ20人と一緒に参加することになった。友達同士でなんとなくできたという集まりの中に自分も入って、活動するようになった。

２　今回（2007年９月）の行動に参加した期間

21日から28日まで連日行動に参加した。

３　目撃した（体験した）人権侵害の要約
（９月２７日第三高等学校の前での体験）

（１）この日に、ターム工第３高等学校の門の前で当局から暴行を受けた。軍隊に取り囲まれ殴られた。逮捕され拘束されている僧侶に対する釈放を求め抗議行動をチャイカサンで行った後、暴行を受けた。この日の行動はおそらく88世代の人によって組織されたと思う。その場には、僧侶はおらず、市民約2000人が当局から弾圧を受けた。

午後0時頃、スーレー・パゴダを出発し僧侶が拘束されているチャイカサン広場へ向かった。しかし、スーレー・パゴダの警戒が厳しく、デモができる状態ではなかったので、バスンダウン（PAZUNDAUNG）に戻り、再びチャイカサン広場へと向かった。チャイカサン広場に向かったのはそこに僧侶が拘束されていると聞いたからである。

（２）午後２時ころ

チャイカサン広場で、釈放要求などの抗議行動した後に、ターム工第三高等学校の門の前を通りかかった。私達は、そこで軍に取り囲まれた。

行く先に防御線がはられていて、突破するかそれともバラバラになって逃げようかを話し合っていた。デモ隊が先に進むか引き返すか、どうするか相談していたところ、後ろからトラックが２台つっこんできて、3人亡くなった。自分たちはバラバラになって逃げることにした。

そこで、学校の中へ塀を乗り越えて進入して逃げようとしたところ、一緒に逃げようとした人の一人が後ろから銃で撃たれて亡くなった。

もう一人は、学校に逃げ込もうとしたところ道路と学校の間の溝に落ち込んだ市民がいた。溝に落ちたところを、当局から撃たれてその場でその人は亡くなった。ここで、デモ参加者計5人が亡くなった。

私たちは、第三学校のすぐ近くにある民家の中へ逃げ込んだ。軍が「出て来い。出て来ないと撃つぞ。」と威嚇し、発砲していた。

その時、下の階にいた人は皆拘束された。拘束された人の数は40乃至50人で、その中には私

Copyright 2008, Human Rights Now. All Rights Reserved

の友人2人も含まれていた。

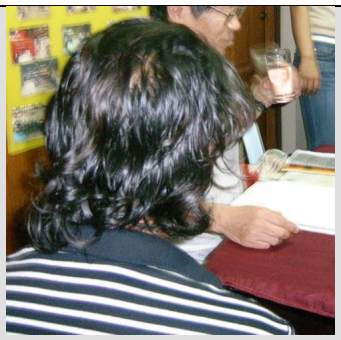
私たちは2階に行く階段のところで潜んでいた。下の階にいた4、50人のうちの一人が「どうしても行かない。」と言い、しがみついて連行に抵抗していたら、その場で発砲されて死亡した。銃は私たちの方にも発砲されたが、当たらなかった。

下の階の者を連れて行ったあと、軍隊が戻ってきて、2階の私たちに「下りてこい。」と言ったため、私たちは下りた。私たちは、タームエ第三高等学校の近くの路上にうつぶせにさせられた。うつぶせにされたのは、私たちやデモ行進に参加している人だけでなく、近くで取り巻いていた人も含め、およそ400-500人くらいだと思われる。アスファルトに顔をつけられ、殴ったり蹴ったりの暴行を受けた。一人の女性は顔面を警棒で殴られて血を流していた。当局の人から「お前たち、さっき言っていたことをもう一度言ってみろ。」と言われた。

「闘うクジャクの旗（もともとは全ビルマ学生連盟の旗、シンボル）」や、携帯電話を持ち去られた。

軍の偉い人が来て、「もう一度やると酷いことになるぞ」と言われ、その場で釈放された。

Copyright 2008, Human Rights Now. All Rights Reserved



氏名：　Ｋ氏

性別：　男性

年齢：　　20 代

１　過去の民主化活動の経験、内容、参加の経緯

（１）過去の経験

88年のときも96年のときも参加していない。今回が初めてである。

（２）内容

気分が悪くなった人や僧侶の介護をしたり、僧侶に食事を差し上げたり、飲み物を差し上げたりする活動をしていた。以前は俳優のチョートゥ氏やコメディアンのザガナー氏がやっていたが、彼らが逮捕されてしまったので、彼らがやっていたのと同様の活動を行った。活動に参加したのは、僧侶の行動に胸を打たれたからだ。

２　今回（ 2007年　9月）の行動に参加した期間

24日から29日まで。

３　目撃した（体験した）人権侵害の要約

（１）　26日

シュエダゴン・パゴダで、軍隊が人々に警棒で殴りかかっているのを目撃しました。目の前で殴られている僧侶は２００人くらいいました。それは自分の目で見た数ですので，実際にはもっと多くの人が連行されたり暴行されたりしていたと思います。このような光景にはデモ中にしょっちゅう出会っていました。

これから申し上げることは，１１時半ころのことです。１２時になっていないということは，昼食をとり終わっていない僧侶もいたから憶えております。食事していた僧侶も殴られています。その正確な数はわかりませんがそのときに連行された人もいます。

さらに発砲も目撃しました。私が参加

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved

した行進が，アローカンナ通りに差し掛かったときのことです。

このときの隊列は，僧侶は２００人～３００人くらい，一般人は２００人程度でした。タキンミャ公園付近でのことです。この地で，軍隊が待ち構えていました。このことにより，軍隊に西も東も挟み撃ちにされて包囲されていました。

ここで軍隊に行進の解散を命じられたので，自分たちは先には進めなかったので後ろに戻りましたが，そこで挟み撃ちにされた状態になりました。前にも後にも軍隊がいました。

そのとき，私たちが困っていたところで，この地域の住民が出てきて，軍をくい止めてくれました。軍は直接乗り出して来ずにまずSwan Arr Shinを前に出たせて，いざこざを起こさせました。そのため，Swan Arr Shinが住民とぶつかり，乱闘が始まったのです。Swan Arr Shinは棒を持ったり，手で殴りかかったりしてきたので，再び衝突が起きました。

このいざこざは，市民の方が人数が多かったために，Swan Arr Shinが後ろに下がることになりました。軍は自分たちの隊列を崩さないために発砲を開始しました。

多くの住民は，住居の方へ逃げていきましたが，撃たれて倒れた市民もいました。

軍隊は，発砲して住民を蹴散らし，元々デモを行っていた者たちに近づいてきて，発砲を開始しました。後ろにも軍隊がいました。

私が耳にした限りでも４，５回の銃声を聞きました。

発砲をして私たちを制圧したあとに，軍の方はわれわれに顔を向けず，背中を向けて立てと要求してきました。

このとき，これでは埒が明かないと考え，デモ隊のNLDの青年部の幹部が軍隊の中佐に対して，人権関係の配慮について交渉しました。「発砲しないでくれ。」と。それには，自分も参加しました。最初に軍側が譲ったのは，僧侶が３人ひと組になってその場から出て行くことを許したことでした。

一般人に関しては，譲りませんでした。解散を許さなかったのです。その後の交渉にも軍は応じませんでした。僧侶が出て行くときに，横道を通って他の人も出て行けるように配慮しました。そこから出ていった人もいるし，出て行けなかった人

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved

もいました。

　軍は普通の居住地区の中では発砲しないという了解があったので，そこに逃げていけば撃たれることはないと考えて，逃げる人々にはそう誘導しました。自分もそうして出て行きました。後ろからの発砲とかそういうものはありませんでした。

　残った人たちはたぶん捕まったのではないかと思います。１００人ぐらいだと思います。逃れられた人は３０人から４０人くらいではないでしょうか。３時くらいの出来事でした。

　脇から出てきて軍を停めようとしてくれた市民の人で銃弾が当たった人は４，５人でした。デモは１人撃たれました。何発くらい発砲したかは分かりません。生死は分かりません。

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved

氏名：　Ｔ氏
性別：　男性
年齢：　50代
職業：　自営業

１　過去の民主化活動の経験、内容、参加の経緯

これまでに民主化運動に参加したことはない。

２　今回（2007年９月）の行動に参加した期間

9月21日から、毎日デモ行動に参加した。

３　目撃した（体験した）人権侵害の要約

27日午前5時頃、襲撃を受けたングウェチャーヤン僧院を見に行った。ングウェチャーヤン僧院付近には、市民5、6人しかいませんでしたが、午前10時頃には約100人ほどに増えた。

僧院の付近には兵士が配備されており「関係ない者は来るな」と言って、盾を向けて押してきました。「77」という標識をつけた兵士がガードしていた。

ングウェチャーヤン僧院にたくさん人々が集まったのは、軍が攻撃して暴力行為があり、血の跡が残っているなどの情報が広まったからだと思う。

午前11時頃、人々3000人乃至4000人が集まっていたが、軍がスピーカーで「500人以上集まってはならない。解散しろ。射撃命令は出ているぞ」と繰り返し呼び掛けていた。

午前0時頃、2台のハイラックスカーが止まっていて、待機していた兵士が催涙弾を３発発射した。発射した兵士は防護マスクを付けていたが、私たちは付けておらず、目がかゆくてよく見えなくなった。

そこへ、兵士が警棒よりもっと大きくて太い棒を持ってきて襲いかかってきた。棒で殴られて、中年男性が2人殺されたのを見た。撲殺されたのは、私と同じ地区に住んでいた人だった。その人達の死体を兵士が引っ張って行った。

人々は、その地区の電力会社の前に置いてあった電柱用の大きな丸太やコンクリートを、5～10人がかりで運び、道にバリケードを作った。

この地区にある第二高等学校は、いつもは15時半ころ授業が終了するが、その日は14時半に繰り上げて生徒たちを下校させた。

その後、17時半に発砲があり、5人が死亡した。そのうちの1人は、よく知っている9年生の男子学生（15、6歳）で、胸に弾を受けていた。あとの4人は中年男性で、額に弾が命中していた。額に銃弾を受けた人を、自分も含め3人くらいで、サイター（人力自転車）に乗せて、キンガンジュン区の病院に運んで行ったが、彼は途中で息が絶えた。

４　事件後メイソットへ来る経緯

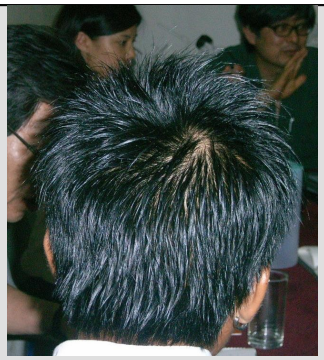
私は10月13日、住民調査の名目でやってきた地区の役人に逮捕されそうになったが、そのときは家にいなかったので逮捕を免れた。おそらく、地区役所の近くにあるングウェチャーヤン僧院を見に行ったときに、私を知っている役人が私の顔を見ていて、報告したのだと思う17日にも役人が家に来たが、私は家にいなかったので捕まらなかった。しかし、同じ地区で捕

Copyright 2008, Human Rights Now. All Rights Reserved

まる人が出てきたので、私も捕まってはいけないと思い、脱出した。

10月22日にヤンゴンを脱出し、長距離バスに乗って、カレン州のパーアンを経由し、24日メイソットに到着した。

Copyright 2008, Human Rights Now. All Rights Reserved



氏名：　Ｋ氏
性別：　男性
年齢：　　30 代
職業：　自営

１　過去の民主化活動の経験、内容、参加の経緯

特に言及なし。

２　今回（ 2007年　９月）の行動に参加した期間

９月19日、21日から26日にかけて、僧侶の抗議活動を支援した。

３　目撃した（体験した）人権侵害の要約

19日、僧侶らがシュエダゴン・パゴダに集まってきた際、USDAやスワンアーシンが僧侶らに対し妨害するのを防いで、僧侶らを守るための活動をした。抗議行動のために、僧侶が町へ出た時にも一緒についていった。

26日は、軍が厳戒態勢を敷き、シュエダゴン・パゴダに一人たりとも僧侶が入れないようにしていた。ある僧侶が私の目の前で、「自分は僧なのに、なぜパゴダに入れないんだ」と、軍の責任者に詰め寄っているのを聞いた。

軍隊は以前から付近に駐屯していたが、26日までは妨害行動に出ることはなかった。

26日午前８時頃から僧侶らがシュエダゴン・パゴダに集まってきたが、軍が土足で境内に踏み込んできて、僧侶らがパゴダの中心部へ入ることを許さなかった。そのため、シュエダゴン・パゴダの東門付近で、　700人くらいの僧が集まって読経をしていた。

私は、僧侶らに水を差し上げたり、催涙弾に備えてマスクを渡したりした。バハン区の学生40乃至　50人が一緒に活動をした。

10時頃、アーザニー（AR ZAR NI）通りから軍のトラックが５台ほどやってきた。軍から境内から出ていくように命じられ、私たちはそこから離れたが、僧侶らは残っていた。

私たちはパゴダから下り、境内の端で僧侶らの様子を見守った。

10時半頃、軍が、座して読経をしている僧侶らに向かいスピーカーで出ていくよう命じた。 700人の僧侶の内　200人ほどの僧侶が、東のチャウサディー・パゴダまで読経をしながら進んでいった。

12時頃、残りの僧侶らに対し、警察が盾を使って強制排除しようとしたため、僧侶らの多くは、私たちのほうへ下りてきた。下りてきた僧侶らに対し、軍や　Swan Arr Shinの車が　「ここにいないで戻れ」と 呼び掛けていたが、僧侶らはその場に座って読経を続けた。

僧侶らは、軍の責任者に対して　「僧 侶なのになぜシュエダゴン・・パゴダでの 行動が許されないのか」と抗議をしていた。そこへ、警察、機動隊や　Swan Arr Shinらがやってきて、笛を吹いて「読経をやめろ」と言い、僧侶らに襲いかかった。

Copyright 2008, Human Rights Now. All Rights Reserved

幼い見習い僧らは、人の間をすり抜けて逃げて行った。現場には、　30乃至　40人の尼僧も含め、　400人ほどの僧侶らがいたが、軍は彼らに殴る蹴るの暴行を加えたうえ、車に乗せて連行していった。

私は、200人ほど僧侶を避難させるべくバハン区内のニャウンドン僧院につれていった怪我した僧侶の中には、口から血を流している方もいて、私たちは僧院で懸命に介抱した。

ところが、ニャウンドン僧院を軍が取り囲み、7発ほどの催涙弾を撃ち込んできた。軍の仕打ちに怒り、興奮したある男性は、撃ち込まれた催涙弾を持って投げ返した。

当局は、車で僧侶らをシュエダゴン・パゴダまで送り届けると言ってきたが、私たちがその言辞を信用せずに拒否したところ、僧侶らに石を投げつけてきた。

私たちは、地元の人間だけが知っている秘密の逃げ道へ僧侶らをご案内して逃がした。全員がその僧院から逃げた。　15時ころのことだった。

私はいったん家に帰って、18時ころ、シュエダゴン・パゴダを見に行ったが、軍が取り囲んで、参道沿いにある私の店も開店できない状態だった。

最初に夜間外出禁止令が出たのは26日で、夜9時から朝6時までの外出が禁止された。26日以降、バハン地区には配電が止められ、私の店も開けなくなった。

27日以降は、妻が「店を壊されるし、捕まってしまうわ」と言って反対したので、活動に参加しなかった。

４　事件後メイソットへ来る経緯

当局が、バハン地区の住民が今回の抗議行動に一番協力したとみていて、住民をしらみつぶしに捜索しているという情報を得た。

10月1日午前4時ごろ、バハン地区内の私の住む地域とは別のある地域が捜索を受け、205人が拘束された。　60歳以下の者はほとんど逮捕された。活動への参加が目立ったものでなかったり、写真に写っていなかったりした人は比較的早く釈放された。１週間くらいで釈放された人から、　1か月くらいかかった人もいた。

当局は、ローラー作戦のように、地区ごとにしらみつぶしに捜索してきた。

10月3日には、店にいた妻のところに当局が来て、今後政治活動に参加しない旨の誓約書を書くため、私に役所へ出向くように言ってきた。私は、役所へ行けばその場で逮捕されると思い、行かなかった。

現に、弟の知り合いの　18歳の学生も、役所に来て誓約書を書くようにという通知が来たが、その子の母が心配して早く行きなさいと言ったため役所に行ったところ、その場で捕まり投獄された、と聞いている。

そのころ、私の地区に住む人たちが逮捕されはじめた。3日には、すぐ近くに住む叔父さんが捕まった（なお、今、叔父さんは釈放されて北にいる。　3日に捕まり、5日に誓約書を書いて釈放された。警戒されていて、自由な旅行などはできない）。

私は、次は自分だと思い、逃げることにした。

4日、私は、ヤンゴンの近くのダゴンミョーチというニュータウン（振興開発された衛星都市）にある祖父の家へ避難した。

その後、28日にヤンゴンを脱出し、11月3日にメイソットに着いた。

５　現在の状況

妻子はバハンにある自分の家に残してきた。家族とは、ニュージーランドにいる兄を通じて連絡を取っている。家には電話がないが、店の電話は、シュエダゴン・パゴダか

Copyright 2008, Human Rights Now. All Rights Reserved

ら内線のように分岐しているので、盗聴される恐れがあり、店に電話することはできない。

妻子は妻の実家で面倒をみてもらえる。私は、メイソットにしばらくいて、ビルマが民主化されたらビルマに帰る予定である。店は妻に任せているが、とても心配している。

仮名にしてほしい。写真は後ろからにしてほしい。

Copyright 2008, Human Rights Now. All Rights Reserved

市民７（Ｎ氏）

	氏名：Ｎ氏 性別：男性 年齢：不明 職業：自営

１　逮捕に至る経緯

今回、僧侶が立ち上がったのを見て、国民として当然の義務を果たそうと思って参加した。

当局が店を勝手に閉鎖したことがあったため、住民たちは普段から軍事政権に対する不満を持っていたということもある。

私の住んでいるバハン地区は、シュエダゴン・パゴダに近いので、それだけで当局から僧侶の活動を積極的に支援していると思われ、逮捕された。

逮捕される際は、同じバハン地区の姉の家で、１０月３日の朝３時ころ、寝ているところへ当局がやってきて 「聞 きたいことがある」と言われ、連れて行かれた。一つの車（小型バス）に30人くらいが乗せられ、InseinのGTIまで車で連れて行かれた。

同じ時期にバハン地区で、女性が98人、男性105人逮捕された。その地区からは、60才以上のおじいさん、おばあさん以外は根こそぎみんな逮捕されたという感じだった。

逮捕後は 「どういう形で抗議行動 に参加したか」ということや、家が２件焼けたということがあって、それを「誰がやったのか知っているか」ということを聞かれた。

しかし自分の考えでは、放火は警察や当局か、Swan Arr Shin等がでっち上げでやったのではないかと思っている。

２　逮捕中の出来事

GTIでは、相手一人対自分一人の尋問を受けた。一回だけで２０分から３０分。「店をやっていただけで僧侶の行動には関係ありませんよ。」と説明した。もし本当のことを言っていたら、もっと拘束されていただろうし、今ここにはいなかっただろう。

InseinのGTIの中に何人いたかについては、自分の地区の人が集められている場所以外は明確にはわからないが、たくさんいただろうと思う。

その場所は、机や椅子を取っ払った教室のようなところで、寝具等は一切なく、自分が履いていたロンジーをそのまま敷いて寝る状態だった。

水を与えてもらえなかったり、トイレは５人一組で行くよう指示されたりした珈琲は通常２００チャット程度だけれども、それを５００チャット払えば飲ませるということを言われた。

ビルマでは逮捕されれば、荒っぽい扱いを受けるのは当然であるけれども、特にそれを超えて「拷問」を受けたという認識はない。

中には、元気の良い青年がいて「放火は警察がやった！」というようなことを言ったために、当局に殴られた人がいた。

１０月５日釈放。出てくるときには、写真を取られ、誓約書を書かされた。「今後このようなことは一切致しません。

必要があればいつでも尋問に応じます。」
という内容であった。

	氏名：Ｌ氏 性別：女性 年齢：２０代 職業：無職

１　過去の民主化活動の経験、内容、参加の経緯

学生時代、政治活動に参加したことはない。

２　今回（2007 年９月）の行動期間

９月２６日から。

３　目撃した（体験した）人権侵害の要約

（１）２６日は、ＰＡＺＵＮＤＡＵＮＧ通りに行進が通りかかるというので、友達と見に行った。見ているうちに、精神が高揚してきて、行進についていった。

午後１時頃行進に合流した。テンリュー市場の近くで、警官隊が待ち構えていたので、それ以上進めず、自然解散となった。前面に２０人ほどの警官がいて、その後方に軍がいた。解散したのは午後３時か午後４時頃だった。

（２）２７日は最初から参加するつもりで、朝早く家を出て、友達３人（男性２人、女性１人）と４人で、午前１０時頃スーレー・パゴダについた。

パゴダの周辺は、鉄条網が張り巡らされ、厳戒態勢で近寄れない状況だった。私たちは、僧侶は朝食をとってからしか来ないだろうと考え、バズーダ通りのカフェで２時間ほど時間をつぶした。

交差点には午後１時頃到着した。そのとき交差点に僧は２、３人しかいなかった。１０００人近くの市民がいて、経典を掲げて読んでいた。交差点は立体交差になっていた。陸橋から見物している人もいた。

そのとき、トレーダーズ・ホテルのほうから３台ほどの軍の車がやってきた。そこから銃を持った兵隊が降りてきた。市民の中の指導者らしい年配の活動家の人が「怖がるな」と励ましていた。

そのとき、銃声が聞こえた。どこから聞こえたかは
わからない。銃声が聞こえた途端、人々は無秩序に
逃げだした。私もバズータの方向に逃げたサンダル
も脱げて、裸足になった。人がたくさんでうまく逃げられず、すぐ近くの路地に入った。

路地を入ったところには、家が密集していた。家々は玄関を閉めていたが 「開けてくれ」と 頼んで、ある家に飛び込んだ。そのときには、男性の友達とは逸れて、２人（私と女性１人）になった。

その家には１４、５人の市民が逃げてきていた。何階建てかわからなかったが、１階は住居ではなくてコンピュータなどが置いてあり、２階以上は住居になっていた。その建物の中で２時間くらい過ごした。

午後２時か２時半頃、その家の人が、辻々に警備が立っていて、捕まっている人もいると教えてくれた。午後４時ころ建物を出て、路地を通って東に向かい、午後５時すぎに家についた。大通りには軍隊がいた。その日は、友達３人も無事に家についた。

撃たれた人がいたということは聞いたが、長井さんのことは知らない。

４　事件後メイソットへ来る経緯

２７日の晩、一緒に参加した友達のうち男性２

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved

人のところに、地区の評議会（区役所の支所のようなもの）の役人と、Swan Arr Shin のメンバーが話を聞きたいとやってきた。

男性２人は逃げて私のところにきて、当局が来たと教えてくれた。

私自身は、自分が逮捕されるかどうかは確実ではないと思ったが、叔父が評議会で仕事をしており、私の写真（道に座って祈っているところの写真）がリストに載っていると教えてくれたので、とりあえず友人の家へ逃れることにした。

友人の家にしばらくいてから、１０月５日ころ、その家を離れ、男性２人と私とで、北ビルマのザガイン管区のモンユアへ行き、私の親戚の家へ避難した。モンユアへは、マンダレー経由で、車で行った。

親戚からは、付近の人々が 「見かけない 人がいる」と噂をしている（明らかに逃げてきたのだとわかる）から危険だと言われた。それに、親戚の家に１か月以上もいて、迷惑をかけるわけにいかないとも思った。

また、親戚の家に来て１ヵ月くらいしたときに、ヤンゴンの家に電話したのだが、まだデモに参加した人を捕まえているので危ないと言われた。

親戚の人が「メイソットに行けば、迎えてくれる組織がある」と教えてくれたので、１１月１９、２０日頃メイソットにきた。

以上

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved

僧侶１（A SHIN SI-LAN NANDA 氏）

氏名：A SHIN SI-LAN NANDA
性別：男
生年月日
；１９７９年２月２日生
年齢：２８才
備考（特記事項）：

１　過去の民主化活動の経験、内容、参加の経緯

特に出てこない。

２　今回（2007 年９月の）行動に参加した経緯

９月１８日以降、僧侶たちによるデモが散発的に行われていた。私は９月２０日から２６日まで連日活動を行った。私が所属する僧院には、約１００人の僧侶がいるが、若い僧侶２０人を誘い活動に参加し、９月２０日の活動には、他の僧院から参加した僧侶らを併せて約３００人の僧侶で活動を行った。

ビルマの僧侶は、戒律上お金を稼ぐ仕事を禁止されており、身の回りの物や食べ物・住居は、すべて信徒たちの寄進喜捨で賄われている。僧侶は毎朝、托鉢をして、信徒たちが鉢に入れてくれる食べ物で生きているため、市民の暮らしが悪くなれば、お布施が減り、喜捨してくれる食べ物の量が減る、質が落ちる等、市民の暮らしがどういう状態にあるのかということが目に見えて伝わってくる。そのため、市民の生活が困窮していることを肌で感じ、何とかしなければならないとは思っていた。

９月５日、マグエ管区パコック市で、僧侶たちが 「市民の生活が楽になるようにきち っとした政策をするように」と軍政に対し要求を行ったが、軍政はこの要求に応じず、逆に僧侶を取り締まり、僧侶を電柱にくくりつけて殴ったり蹴ったりするという暴行を加えるという弾圧を行った。そのため、全国の僧侶が軍政に対し不審感を抱き、この取り締まりを合理的に解決するため、僧侶が立ち上がることとなった。全ビルマ僧侶連盟という名前の組織が、外国メディア（VOA、ＢＢＣ、RFA 等）を通じ、全国の僧侶たちに「立ち上がれ 」との声明を 発表した。

そしてそれ以降、僧侶たちが政府からの寄進喜捨を拒否する、托鉢を俯せにする（ビルマ語では「ダベイン」という）という意思を表示をしたことから、政府の立場も硬化していった。

私は、パコックの弾圧に対する抗議、国民の生活を貧困から救いたい、国民生活を安全で自由なものとしたいと思い、自分の所属する寺院の他の僧侶とともに９月２０日からから活動に参加した。

９月２６日から軍・治安部隊が発砲等弾圧を加えるようになった。この日、私は僧侶としての試験を受けていたので、最初にシュエダゴン・パゴダで軍と僧侶の衝突があったときには、その場にいなかった。私は修行中の僧侶なので、試験を放り出して、抗議行動に参加したというのは、高位の僧侶から見ると良くない行為だと思うが、私自身は「もう立場はどうなっても良い」、「これは大事なことなんだ」という気　持ちで行動に参加した。

３　目撃した（体験した）人権侵害の要約

シュエダゴン・パゴダで衝突があったという情報が僧院に入り、それを聞いて若い僧侶

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved

20 人くらいを引き連れてすぐにシュエダゴン・パゴダに向かった。

私がシュエダゴン・パゴダに到着する前に、ミンガラ市場付近でデモ隊と出会った。シュエダゴン・パゴダから出てきた僧侶や市民約２万人が、二つのグループに分かれ、一方は、ボーダタウン方面に向け、他方は、スーレー・パゴダ、テインジー市場に向けて行進をした。私は前者のグループにミンガラ市場付近で出会いこのグループに合流し、そこから先は、自分がこのデモ隊の指揮をした。ミンガラ市場から南下してボータタウン・パゴダへと向かった。途中アメリカ大使館の前を通ったので、アメリカ大使館前で演説をしたかったができなかった。ボータタウン・パゴダ到着後、パゴダに入って祈りを捧げるつもりであったが、パゴダの中に入ることができなかった。ボータタウン・パゴダ前で演説をして、８８世代のグループの人も演説をしてくれた。

その日のデモ行進は、平和的なもので、僧侶は経を読み祈りを捧げながら歩き、市民は腕組みをして僧侶の隊を守るように外側を歩くという方法で行われた。

しかし、デモの周りは、常に軍が取り囲んで監視している状態で、行く先をことごとく遮られ、行く手を阻まれると進路を変更するといった追いかけっこをしているような状態だった。

ただ、少なくともその日までは軍の弾圧により人が暴行を受けたり、亡くなったりすることはなかった。

結局、デモ隊は、流れ解散をすることになり、各自が自分の僧院まで別々に歩いていくということになった。タームエ地区に到着した頃には僧侶１０人ほどになったが、軍の車が後ろから付いてきて、サーチライトを照らし、「お坊さんたち、これ以後反政府活動をしないように、「今度したら逮捕することにもなります」というようなことをマイクで後ろから警告してきた。

そこで、私は、指導者とわかる印を腕にしてあったことから、まずいと思い、その場にいたタクシーに乗り込み、自分は今日のデモ行進をして、危険な立場にあるんだと事情を説明し、僧院まで送ってもらった。

その日、26 日の夜にングウェチャーヤーン僧院（８８世代学生グループと繋がりが強く当局からマークされていた。）を軍が襲って僧侶たちを逮捕したことを、同日夜、BBC、VOA、RFA 等のビルマ語短波ラジオを通じて知った。流血の事件もあったと聞いた。

自分の僧院はそれほど目を付けられていなかったために襲われなかったのかも知れない。

４　事件後メイソットへ来る経緯

26 日に僧院に帰ってから、僧院長に、その日抗議行動の指揮をしたこと、帰り道に当局につけられたことを報告したら、僧院長が自分を心配して「お前はもう逃げる」とおっしゃった。僧院長は、次はこの僧院が襲われるとも思ったのだと思う。

９月 27 日にヤンゴンを後にして、モン州のタンビューゼイヤの街から少し離れた僧院でしばらく隠れ住んでいたが、その間に当局がその僧院に４回も問い合わせに来て「ヤンゴンからこういう僧侶が来ていないか」と調べに来たので「これ以上ここにいては迷惑を掛ける」と思い、そこを出て、モーリェメインのアパウンという所に暫くいた。ただ、そこでも安心できないので、タイ国へ逃げることとして、11 月６日にメイソットへ到着した。

自分がいた僧院には、当局が何回も調べに来ているが、破壊等にはあっていない。

５　現在の状況

今後の生活については NLD-LA と今後話し合うことになっているので答えられない。

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved

　ビルマが民主化されたら勿論帰りたいという
気持ちでいる。

以上

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved

僧侶２（ASHIN NANINDA 氏）

氏名：ASHIN NANINDA
性別：男
生年月日：１９７４年１１月１２日
年齢：　３３歳
出身地：マンダレー
職業：僧侶
所属僧院：Ｋ僧院
備考（特記事項）：以前から反政府活動をしていた。

１　過去の民主化活動の経験、内容、参加の経緯

１９８８年当時、私は１４歳でマンダレーのＫ僧院において見習い僧として働いていたが、このとき初めて政治活動に参加した。

８８年の民主化運動後、所属していた僧院のウー・イエワー・ター僧侶を始め活動の中心にいた僧侶が捕まった。私や他の僧侶ら約７００人が僧院に約１ヶ月ほど軟禁され、檀家のもとへ托鉢に行くことを禁じられ、僧院に兵士の見張りが配置されていた。

托鉢に行けないため信徒からの寄進を受けられず、兵士が持ってくる囚人食を食べていたが、囚人食は、豆が腐っており石が混じっていた。

自分達はこの状況に耐えられず、托鉢に行くことを求めてハンガーストライキを行い、反政府活動をしないという誓約書を書いて軟禁が解かれ、一定の地域に托鉢に出られるようになった。

自分はずっと反政府的な思想を持っており、僧侶に対して英語を教えていた。１３０人ほどの生徒を教えていたが、その生徒達に反政府的なことをずっと言っていたことから、その学級は２００６年末に閉鎖されてしまったが、懲罰は受けなかった。

２００６年末から２００７年始めまでメイソットにおいて行われたＰｏｌｉｔｉｃａｌ　Ｄｅｆｉａｎｃｅ　Ｃｏｍｍｉｔｔｅｅの講習に参加した。

２　今回（2007 年９月）の行動に参加した期間

９月２１日、ＢＢＣを通じて全ビルマ僧侶連盟のリーダーであるＵ　ＧＡＭＢＩＲＡの声明、①国民の衣食住を安定させろ、②アウンサンスーチーを含む政治囚を釈放せよ、③燃料費の値下げをせよ、④民族・国民の和解を促進せよ、⑤（国民に対し）８時国営放送の時間にはそれを見ないで拘束されている人の無事を祈ろう、を読み上げた。

９月２３日、２４日にマンダレーで行われたデモに参加し、このデモを指揮した。

デモは１２００人ほど参加し、お祈りを捧げながら街を１周するという方式で行った。

しかし、自分は昨年（２００７年）の９月の原因を作った１人であり、全ビルマ僧侶連盟の一員であり、主にメディアに対するスポークス・パーソンとして、デモ以外の様々な活動をしていた。

２３、２４日以降は、忙しくてデモには参加できなかったが、外国メディアとの窓口のような仕事をし、世界にニュースを配信していた。

３　目撃した（体験した）人権侵害の要約

９月２６日に、当局がデモ中の僧侶に対して警棒で殴りかかろうとしている場面を目撃し、当局に対し暴行をやめるように説得し、その場を納めた。

マンダレーの東の僧院が襲撃されたという情報もあったが、真偽のほどは分からない。

逮捕された僧侶の話を聞いた。Ｕ　ＧＡＭＢＩ

Copyright 2008、 Human Rights Now、 All Right Reserved

ＲＡや、モンヨワ地域のインニャー・ティー・ディーという僧侶が投獄された。インニャーは、反政府活動をしたということではなく、インターネットを使い外国と不正に通信をしたということで逮捕された。

どれくらいの人が投獄されたかは分からない。政府が発表する数字は信用できない。

ただ、マンダレーで言えば、ヤンゴンのように目の前で殺されるといったことはなかった。

４　事件後メイソットへ来る経緯

逃げたのは迫害の手が迫ってきたからである。

Ｕ　ＧＡＭＢＩＲＡや自分も含めて６人の僧侶の写真が賞金付でＵＳＤＡ等の組織に配られることになった。檀家の人がそのビラを見て、危ないと私に教えてくれた。

また、自分はイギリスの大使とも面識があった。イギリスの大使に電話をかけており、世界に発信してもらうように考えていたのだが、そういったことが当局にばれたようだ。

１１月１０日にマンダレーを出て、１２月２０日メイソットについた。

１２月２６日に RFA からインタビューを受けて、私がメイソットに到着したことは全世界に配信された。

５　現在の状況

自分はビルマのためにどうすればよいか、いまでも考えている。

以上

Copyright 2008、 Human Rights Now、 All Right Reserved

	氏名：Ｏ氏 性別：男性 年齢：不明 職業：僧侶

１　過去の民主化活動の経験、内容、参加の経緯

自分自身が軍事政権に満足していないのはずっと感じていた。軍事政権の支配は６０年を経過している。しかし、自分が僧侶であること、自分は支配者ではないことから、状況を見守ってきた。だが今回、国民が苦しめられているのをみて、僧侶としてできることをしたいと思った。

私たちは軍事政権を倒せと要求しているのではない。一方の勢力が他方の勢力を倒したりすることに加担はしない。しかし、今のやり方がよくないことと、市民の生活の安定させることが必要だと感じた。

２　今回（２００７年９月）の行動に参加した期間

９月１８日から。

３　目撃した（体験した）人権侵害の要約

自分の僧院は３００人くらいの僧侶がいる。今回の抗議行動には、ほとんどの人が何らかの形で参加した。僧院長は８、９０歳で高齢のため、一切参加しなかった。それぞれの僧侶が、それぞれの気持ちで参加した。

（１）９月１８日、スーレー・パゴダに集まってお祈りした。これはデモであったとは思っていない。

自分たちのグループ（僧院）では僧侶が５、６０人参加した。それら僧侶だけではなく、一般市民もお祈りに参加していたと思う。別の日にもやった人がいるだろうし、同じ日に他のパゴダでお祈りした人もいるだろう。

お祈りは、ＢＢＣ放送がスーレーパゴダでのお祈りの予定を放送したので、自分たちも自分たちでやれることをしようといって始めた。そのときは、まだ組織だって行動するまでには至っていなかった。

なお、１８日という日付については、記憶違いがあるかもしれない。

私はそれほど政治的活動をしてきたという人物ではない。しかし、知り合いで活動をしている僧や信者から話を聞いたり、それらの人から頼まれて、ビラなどを配ったりすることをしたこともある。これらの活動によって、当局に目をつけられていた。

（２）９月２６日のデモは、行進そのものには参加していない。しかし、行進している僧侶のために、袈裟を直したり、必要なモノを持っていったりするなどの後方支援をした。

２６日夜、近くの僧院で僧侶がつかまったとの情報が入ったため、警戒していた。逃げる計画もあった。我が僧院は、軍に襲撃されたということはないが、ＭＩ（軍情報部）は、朝４時頃にしょっちゅうきていたことから、当局から目をつけられているのは意識していた。

２６日にタームエ区で発砲があって人が死んだ

Copyright 2008、Human Rights Now. All Rights Reserved.

ことも知っている。

４　事件後メイソットへ来る経緯

　１０月２９日にヤンゴンを出て、３０日にここへ来た。

逮捕されるのが怖くて逃げだしたというのはあるが、本当は言葉も通じない外国に来たくはなかった。でも、ビルマにいれば捕まる恐れがあった。

　ビルマ軍事政権は、わたしがリーダーであったかどうかは気にしない。「あいつが参加した」 という情報が入ればすぐに逮捕する。現に私の写真を持って訪ねている人がいるとも聞いた。

　私はデモに参加していないので、デモで写真を撮られたわけではないが、僧はみな、僧侶として区役所に登録する必要があり、そのときに提出した写真が使われたのだと思う。それに、USDA が、私が後方支援などに携わったことを当局に通報しており、何らかの形でデモにかかわったのが分かったのだと思う。

以上

Copyright 2008、Human Rights Now. All Rights Reserved.

	氏名：U KESANINDA 性別：男 年齢：不明 職業：僧侶 備考（特記事項）：

１　過去の民主化活動の経験、内容、参加の経緯

話には出てこない。

２　今回（2007 年９月）の行動に参加した期間

９月２５、２６、２７日に大通りをデモ行進した。

３　目撃した（体験した）人権侵害の要約

（１）私が、デモに参加した理由は、①パコックで行われた僧侶に対する弾圧に抗議、②アウンサンスーチーを含む政治囚の釈放、③国民生活の安定・向上、④人権蹂躙状態の排除、軍事政権の排除を目的とするものでした。

私の僧院からは４、５人が活動に参加しました。私たちは、BBC や RFA、VOA などの海外メディアの報道によりデモの予定を知った。

（２）２５日、僧侶たちはシュエダゴン・パゴダに集まって祈りの儀式を行った。その後、スーレー・パゴダに集まってさらにお祈りをした。私はスーレー・パゴダから参加した。

そこでは、コー・アオという詩人が演説をした。その他にも僧侶が演説をしていた。この時点では、妨害はなかった。５００人くらいの僧侶が参加していたと思う。他に一般の人もいた。

スーレー・パゴダで祈りを捧げた後、ミンガラ（ＭＩＮＧＡＬＡ）市場の辺りを歩いて、カンドージー（ＫＡＮＤＡＷＧＹＩ）湖のそばに立てられているアウンサン将軍の銅像のところに行って祈りを捧げた。

（３）２６日午後１時頃にスーレー・パゴダに行ったが、そこは軍に囲まれて入れない状態だった。軍は空に向けて威嚇発砲をしていた。

そこで、私たちは、アメリカ大使館の前で軍に対する抗議活動をした。そこには１０００人くらいいた。

その後、ゴーダタウン・パゴダへ行きそこでお祈りを捧げた。その後僧侶が２手に別れた。

一方は、アウンサン将軍通りを歩き、他方はウーザーラープラザを経由してミンガラ市場へ向かった。自分は、後者の方へ参加した。

（４）２７日、午後１時頃、チャイカサン・パゴダに行ったが、チャイカサン・パゴダを軍が取り囲んでおり、近づけない状態だった。

チャイカサン・パゴダに集まれなかったので、タームエ区に行き、そこでも集まれなかったことから、バハン区を通過して、シュエダゴン・パゴダに行った。

しかしそこも集まれなかったのでスーレー・パゴダに行った。トレーダーズ・ホテル前で市民と合流し、私が市民の先頭に立って、お経を唱えながら歩いた。私の他に５人ほどの僧侶がついてきた。

Ｑそこは、長井さんが撃たれたところ？

そうだ。自分たちは一般の市民に守られる形で行進をしていた。自分ともう一人の僧侶が先頭で行進をしていたが、そのうち５人くらいの僧侶が集まってきて、一般市民が自分たちを守る形で行進した。

トレーダーズ・ホテルからスーレー・パゴダに向かう途中で、二人のジャーナリストが取材をし

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved

てきた。

一人はイギリス人だったと思うが、もう一人は、あとでわかったのだが、長井健二さんだった。

長井さんはビデオで撮影をしていた。

軍が道をふさいだので、自分たちはアノーラター（ANAWRAHTA）通りとスーレー・パゴダ通りが交錯する角のところで座り込んだ。

そこへ、僧侶の格好をした者が近づいてきたが、それは僧衣を着た兵隊であった（と思われる）。

その僧衣を着た兵隊はパンソーダー（PANSODAN
）の方へ行ってくださいと言った。

自分たちはすぐにパンソーダーの方へ行かずに、そのままそこに座って、経を唱え始めた。

自分たちは２０分ほど経を唱えた。

するとトレーダーズ・ホテルの方から軍の車が来て、催涙弾を発射してきた。

さらに兵士達が車から降り、警棒をふるって群衆を殴り始めた。

その後２人の兵士が銃を構えて発砲した。それは威嚇ではなく、狙ったものだった。

その銃弾のうち１発が、自分たちと行動をともにしていた僧侶の右肩に当たった。

彼は捕まって、ディガンジュンという場所に収容された。

その場では長井さんも撃たれた。

長井さんは撮影をしていた所を撃たれた。自分たちがデモをしなければ長井さんは撃たれなかったのではと後悔している。

Q 軍政はたまたま流れ弾に当たったと行っているが？

長井さんは、南オッカラパ区のングウェチャーヤン僧院が襲われたことについて取材をし、一部始終を撮影していた。それに軍政が目をつけて、撃ったのではないのかと思われる。

Q　なぜ長井さんが僧院の取材をしていたことを知っているのか？

BBC、RFA がそういった報道をしていたし、他の僧侶もそう言っていた。

長井さんの名前を聞いたのはあとになってからだが、日本人でビデオを回している人は確かにいたので、（その人が）長井さんだったと思う。

自分が直接に長井さんと話したことはないが、奪われた長井さんのカメラにはきっと自分も写っているだろう。

Q　長井さん以外に襲われた人は？

銃弾が男に当たって死んだと聞いているけれど、自分は目撃していない。胸に当たったようだ。

他にも女の人に銃弾が当たり死んだようだ。

もう一人僧侶が死んだと聞いているが分からない。

４　事件後メイソットへ来る経緯

自分は事件の後は、僧院に戻らずにスーレー・パゴダの近くで隠れていた。

９月３０日に一度僧院へ帰ったときに、当局の者が写真を持って調べに来たと他の僧侶から聞いたが、それが自分の写真か否かは分からない。その後、すぐに僧院を出て、あちらこちらに隠れ住んでいた。

長井さんのカメラの中には自分が写っているだろうし、２７日に僧衣をまとった兵士が自分に話しかけてきたことから、自分は当局に把握されており、危険だと思った。

１１月７日にヤンゴンを出て、１０日にメイソット到着した。

以上

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved

	氏名：Ｕ氏 性別：男性 生年月日：３０代 職業：僧侶 備考（特記事項）：ヤンゴン付近出身

１　過去の民主化活動の経験、内容、参加の経緯

２００７年８月２８日にバングーウオ近郊のタナッピという村でビルマの軍事政権の批判をして、抗議を呼びかけた。

２０名ほど賛同者が集まり、３時間ほどかけてバングーウオまで行進をした。

すぐに妨害を受けて拘束された。

翌朝の９時３０分頃 「今後一切政治活動を しない、したら重罰を受ける」という内容の誓約書にサインをさせられた。

解放はされたが、その後も監視があったと思われる。

その後、マンダレーの僧院から、国民の生活が貧窮して僧侶への寄進が減ってきており、これは軍事政権のやり方に問題があるために抗議をしようという連絡が来て、自分もその通りと思ったがなかなか行動がとれなかった。

２　今回（2007 年９月）の行動に参加した期間

９月１６日から９月２６日の間。

３　目撃した（体験した）人権侵害の要約

９月１６日に自分たちは政府に対して要求を出した。

パコックで事件があった後、政府は僧侶に対して托鉢に行くなと言う命令を出し、兵士が見張って、托鉢に行くことや、檀家の人が寄進を持ってくることをやめさせた。

そのことをやめさせるようにバングーウオの僧侶が声明を出したのだった。

回答が全くないので、自分たちは９月１７日からバングーウオの町で行動を始めた。

自分たちは、バングーウオのシュエダゴン・パゴダに僧侶達が集まるように指令を出した。

政府当局や USDA などの組織が妨害をした。それでも多い時には５００人くらいの僧侶が集まった。

托鉢の鉢の上に教本を乗せて、それを読みながら抗議を続けた。

９月２４日にヤンゴンに出てきて、南オッカラパの僧院に住むようになった。

自分が２４日にヤンゴンに行ったのは、８月の事件で当局から監視を受けていたにもかかわらず、バングーウオで様々な活動をしたため、これ以上バングーウオにいては危険だと思ったからだった。

自分としては、ビルマは１９４８年に独立し６０年もたっているのに国民生活は進歩しておらずこれは政府が悪いと思い、僧侶達の行動に参加しようと思った。そこで、９月２６日の僧侶達のデモに参加した。

２６日午後２時半頃シュエダゴン・パゴダの集会に参加したが、シュエダゴン・パゴダから出てきたところを襲撃された。政府は、収容されていた元囚人達や USDA のメンバー達を使って、煉瓦のかけらを僧侶達に対して投げさせた。自分にも煉瓦のかけらがあたり、左前頭部を怪我した。意識を失うくらいの重傷だったが、信者達に運んでもらった。

僧院に戻ったら捕まるので、信徒の家で治療を受けた。

怪我をした人間は、自分の近くだけでも４、５人、他にもたくさんいたと思う。

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved.

４　事件後メイソットへ来る経緯

治療をしてくれた信徒の人は自分を南オッカラパの病院に入院させてくれた。

入院した翌日（９月２７日）、その病院の看護師が、当局が僧侶を探しに来ていると教えてくれた。

そこで、病院を裏口から抜け出して、南オッカラパの見知らぬ人の家にかくまってもらうことになった。

しかし、まだ危険だったので、そこで２日過ごした後、僧衣を脱いで、普通の格好をして、帽子をかぶって（包帯を隠すため）、テンガンジュンというヤンゴンの近くの町に行った。

そこでも一般人の家で隠れ住んだ。そこには１７日間くらいいた。

そのころ、政府がデモに参加した僧侶を捕まえるため、僧侶は一般人の家にいてはいけないという布令を出した。そこで、バングーウオの田舎をあちこち移動し、隠れ住み、１１月８日にメイソットに到着した。

５　現在の状況

現在でも政府は僧侶を追いかけていると思われる。

以上

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved.

	氏名：Ｔ氏 性別：男性 年齢：３０歳 職業：僧侶

１　過去の民主化活動の経験、内容、参加の経緯

特に言及なし。

２　今回（2007 年９月の）行動に参加した期間

デモには、２４日、２５日、２６日と参加した。２７日は参加していない。

３　目撃した（体験した）人権侵害の要約

デモ自体は、特に政治的な要求を掲げて行進したわけではなく、人々が十分な衣食住が供給されることを望んで抗議をした。

特にデモクラシーを叫んだことはない。

２４日は、シュエダゴン・パゴダからチミンダイの方へ行って、それからレーダ大学の近くの交差点へ行って、そこを北上して、８マイルを行進した。

このときには、特に当局からの弾圧はなかった。

２５日も何もなかった。

２６日の午前１時に夜間外出禁止令が発表された。それは、夜の１８時３０分から朝の６時３０分まで外出してはいけないというものだった。それから厳しくなったようだ。

２６日のシュエダゴン・パゴダでの僧侶の集会に参加した。

シュエダゴン・パゴダに行く時に Swan Arr Shin（政府がならず者を集め僧侶達を襲うために結成された団体）に襲われると危険なので、ばらばらに歩いていった。

しかし、シュエダゴン・パゴダについた時にはすでに政府が襲撃していた。

そこの東門に、USDA や消防士や警察や軍が襲いかかってきた。

警棒で殴ったり、催涙弾を撃ってきたりしてきた。

催涙弾には毒が入っていた。

自分は攻撃された時にすぐに逃げ出したのでよく分からないが、市民が催涙弾の空薬莢を持ってきて 「これには毒が入っていますよ」と教えて くれた。

おそってきたのは１時ころだと思うが、時計を持たないのでよく分からない。

煉瓦を投げているのも見かけたが、自分は催涙弾で攻撃を受けた。

自分の見た限りでは５～６人の僧侶が捕まり車で運ばれていた。

市民も３～４人拘束されているのを見た。

集まっている人は非常に多かったが、数はよく分からなかった。

自分は逃げ出してシュエダゴン・パゴダの近くの僧院に隠れた。

４　事件後メイソットへ来る経緯

２６日以降はいつ検挙されるかと、非常にびくびくしていた。

自分は僧院の天井裏に隠れていた。

（２７日からデモに参加しなかったのは、戒厳令が出され、非常に行動が難しくなったのと、２４、２５、２６日の行動で十分に国民に対する義務は果たしたからだ。）

Swan Arr Shin のメンバーが僧院の周りをかぎまわっており、危ないと感じたので逃げた。なぜ分かったかというと、自分の知り合いで Swan Arr Shin に入った人がいて、その人が僧院の近くをまわっていたからだ。

９月２９日にヤンゴンを出て、バングーウオ管

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved

区の色々な町で１ヶ月くらい暮らしていた。

　あちこち歩いたり車で動いたり匿ってもらいながら、カレン州を経由してメイソットに来たのは今年の１月になってからだった。

５　現在の状況

　現在の生活は決して楽ではないので、皆さんが助けてくれるとうれしい。

　色々なところでインタビューを受けたし、協力してきたけれど、お礼をもらったこともないし、正直あまりインタビューは受けたくはない。

以上

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved

	氏名：Ｃ氏 性別：男 年齢：２０代 職業：僧侶 備考（特記事項）：ラカイン出身

１　過去の民主化活動の経験、内容、参加の経緯

特になし

２　今回（2007 年９月の）行動に参加した期間

９月の活動に参加した。２５日～２６日まで参加した。

３　目撃した（体験した）人権侵害の要約

２７日スーレー・パゴダまで朝９時頃状況を見に行ったが、長井さんが撃たれたときにはいなかった。

朝の９時頃、シュエダゴン・パゴダはかなり厳しくなっていたので行けないが、スーレー・パゴダはまだ大丈夫ということで、同僚に誘われて状況を見に言った。

Ｑどうして活動をしたのか？

もともと、現在の政権に対し大変不満を持っていた。しかし立ち上がろうとすると弾圧されるから何もしてこなかった。

昨年の９月に立ち上がったのは宗教界が団結したからよい機会だと思った。

８８年の民主化時代は子供だったのでよくは覚えていない。しかし、歴史的な出来事であると認識していた。今回も宗教界が立ち上がったと言うことで、歴史的な出来事だと思い、これに身を置きたかった。

自分の僧院では、あと２人参加した。

２５日は、僧院から一人で、集会があるヤンゴンの都心の方に歩いていた。

ガバーエとういうパゴダの近くで僧侶に出くわして、シュエダゴン・パゴダで集まりがあると聞き、そこへ行った。

シュエダゴン・パゴダには１３時ころついた。そこでは祈り（儀式）に参加した。

その後、シュエダゴン・パゴダの東門を出て僧侶の行進に加わった。

シュエゴンダインという通りを歩き、ガバーエー・パゴダの方へ向かった。

何人いたかはよくわからない（たくさんいた）。

ガバーエー・パゴダでは僧侶による集会があった。そこには一般の人も参加していた。

そこでは一人の僧侶が演説をしていた。

その演説の内容は、①パコックの出来事に対する政府の対応の非難、②アウンサンスーチーを含む政治囚人の早期開放、③国民和解のための対話の呼びかけというものだった。

Ｑ（演説をした人は）全ビルマ僧侶戦線の人なのか？

知らない。

この日妨害は知る限りではなかった。

２５日は私の僧院からは私のみだったが、２６日には私の僧院から３人で出かけた。

シュエダゴン・パゴダに１２時半ころについた。

そのころには、軍が僧と民衆に対し、催涙弾を投げたり、警棒を使って殴りかかったりしていた。発砲はなかった。催涙弾の煙がすごくて、よく見えなかった。

軍が僧を殴っているのを見たが、私は、じっと見ていたわけではなく、直ぐ逃げた。

私は、シュエジンというシュエダゴン・パゴダ

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved

内にある僧院に逃げ込んだ。シュエジンはラカイン出身の僧侶が多かったため知っていた。

４　事件後メイソットへ来る経緯

２６日、僧院に帰る時に、僧院の前で、信徒の人から声を掛けられた。それは「お坊さん、帰らない方がよいですよ、お坊さん達のことを聞きに来た人たちがいましたよ。」というものだった。

１０月１日には、もう僧院に帰ったら危ないと思って逃げ出した。

僧院を出て、タクシーに乗りモービーというヤンゴン郊外の町に行った。そこの信徒の家に暫く泊めてもらい、それからは近くの僧院へ隠れていた。

モービーでも危険だと感じたので、故郷に帰ろうと思い、１１月末にヤンゴンの叔母の家に行った。そこで、叔母にラカインに戻るつもりだと話したが、叔母からは、ラカインには家族がいるため、家族にも危険が及ぶから戻らない方がよいといわれた。

叔母の家には、モン州のモーラミャインで商売をしている娘がたまたま来ていたので、その従兄弟の家に一緒に連れて行ってもらった。

モーラミャインでしばらく過ごしていた。特に尋問を受けたといったことはなかったが、やはり自分としては、そこも安全ではないと感じていたので、１月１８日にビルマ側国境の町であるミャマディーへついて、それから１月２０日にメイソットへついた。

Ｑ　９月２７日から１０月２日まではどうやって生活していたのか？

２６日以降は僧院には戻っておらず、信徒の家で生活をしていた。その間に政治的な活動をすることはなかった。

１０月１日に、いったん僧院に帰ろうと思ったが信徒の人に危ないと言われ、そこから逃避行が始まった。

５　現在の状況

今は、僧院にいる僧侶と全然連絡は取れていない。一緒に参加した僧侶とも連絡が取れない。

（たとえばNLDＬＡなどの）海外の民主化勢力が海外にこの事件についてビデオを撮って海外に知らせるときに自分の顔がビデオに映っているのは相当危険だ。

それが軍事政権側にばれると追われてしまう。だから帰れない。

９月２６日に僧院に帰ってきたときに人相等について訪ねられたと信徒の人が話しているため、何らかの形で自分が参加したのがばれているという不安は常にある。

以上

Copyright 2008、 Human Rights Now. All Rights Reserved